
迷宮エトランゼ

月海苔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷宮エトランゼ

【Nコード】

N2498X

【作者名】

月海苔

【あらすじ】

ベットで寝たのに起きたら真上に青空。いったいどうなってんだよ・。
的な感じで始まるトリップ迷宮ファンタジー。主人公は大学生男子。だらけた生活を送っている典型的バカ学生のゲームヲタク。そんな彼が送り込まれたのは前日に寝るまでやっていたゲームの世界だった。というお話。

※・この物語はややハーレム臭いかもしれません。

・この物語はやや主人公に補正が掛かります。（主に戦闘力と魅力
e t c）

・少々過激な描写を含むかもしれない予定です。（R15程度？）

以上の項目と駄文に耐えられる方は暇つぶし程度にご覧あれ。そう
じゃない方はお戻りくださいまし。

番外之巻 キャラクター簡易設定集（前書き）

おはにちばんわ、月海苔です。何気なくPV数見たら7000超えててリアルに鼻から汁が飛びました。びっくりしました。なので、お札の意味も含めて設定を少し晒してみようかと思っています。これからもなんらかの節目があったりしたら番外編やおまけ設定を晒そうと思います。最後に、拙作を見てくださる皆様に感謝を。

P.S. 次の本編はおそらく日曜に書けると思いますので、書きあがり次第更新します。

番外之巻 キャラクター簡易設定集

ギルド、〈グロリオサ〉について

構成人員五名の超小型ギルド。ギルドメンバーは全員素人冒険者だが、コウ・ミスミ以外は一芸に秀でていたりするので地力は高い。現在ギルドランクE（五話時点で）。名前の由来は百合科の花であるグロリオサ。花言葉は天分、華麗。人員は足りないがギルドマスターのおかげで資金は潤沢である。

グロリオサの構成メンバー詳細

オリーブ・デ・ラ・ロンバルディア（18）

ギルドマスター兼フロントガード。ジョブは騎士、堅牢な防御を得意とする職である。西方の国の大貴族の長女（上に二人兄がいる）。とある事情で現在家出中である。金髪を高い位置で結い上げている活動的な美人。目の色は薄い青。性格はいたって真面目でやや不器用。どこかヌけている。興奮すると仕草がやや芝居がかった感じになる。恋愛や性的な話題に弱く、すぐ赤くなる。名前の由来は木犀科の木であるオリーブ。花言葉は平和、知恵。また、オリーブは平和と勇気の象徴としても用いられる。

三隅 香／コウ・ミスミ（19）

レフトフロントアタッカー。ジョブは剣士、名の通り剣による攻撃を得意とする職である。異世界人（仮）。気づいたら無一文で見知らぬ土地にいた不憫青年。しかし最近は美少女だらけの環境で順風満帆な冒険者生活を送っているリア充である。もげろ。大学が地元と違う土地だったので一人暮らしをしていた。家族構成では長男。下に弟と妹がいる。黒の短髪にこげ茶の目の典型的日本人である。普段はボンヤリとした無害そうな青年である。行動にややギャグ補正あり。割とバーサーカー気質であり、戦闘に関しては才能がある様子。また、異世界転移後に身体能力などが上がっている。原因は・・・。名前の由来はキンポウゲ科の花ミスミソウから。花言葉は忍耐、自信。

カトレア・パフィオペディルム（14）

メインアタッカー。ジョブは考古学者。学者のジョブは専攻科目で分岐しており、考古学者はその名の通り古代文明についての知識を収めている。完全な後衛職であり、古代語魔法と、詠唱が長く威力が大きい上位古代語魔法を操ることができるが、カトレアはまだ上位古代語魔法を使えない。やや裕福な知識層の出身で両親ともに学者。大迷宮の不可思議さに魅せられブルーゲンビレアまでやってきた。紫の緩くウェーブした髪に同色の目。貧乳。背が低い。やや人見知り気質だが慣れればどうということはない。古代ヲタクで迷宮ヲタク。名前の由来は蘭科の花カトレアのパフィオペディルム属から。花言葉は華やかさ、純粋な愛。

マリーゴールド・アストウリアス（19）

ライトフロントアタッカー。ジョブは戦士。攻撃特化の紙装甲職で、メイスや槍、剣などを用いることが多い。マリーは槍を使う。南方のとある部族の戦士見習い。戦士としての修業で迷宮にきたが、気が穏やかで水も豊富なブーゲンビレアをすっかり気に入ってしまい、修業が終わっても暫く帰る気は無いらしい。こげ茶色の長い髪に琥珀色に近い色の目。グラマラス。カラッとした明るい性格。下ネタには強いが恋愛にはウブ。海を気に入っており、最近の趣味は釣りらしい。釣りの腕前は大了たことない。名前の由来はキク科の花であるマリーゴールド。花言葉は信頼、可憐な愛情。

タイム・ジュデッカ（18）

ガードウイング。ジョブは狩人。弓を使う中々後衛の職。罾などの警戒に優れている。しかしタイムは弓を得意としていない。元はオリーブ専属のメイド。敬愛するお嬢様の護衛兼世話係として着いてきた。豪華な縦ロール気味の金髪に緑の目。所作が貴族っぽく、口調も貴族っぽく、見た目も貴族っぽい。しかし従者。お嬢様大好き人間のお嬢様ヲタク。オリーブのためなら死ぬる、などと常日頃から口走るくらい。男性が苦手らしい。やや神経質だが気配りができる人。名前の由来はシソ科の花であるタイム。花言葉は行動力、勇氣。

迷宮之巻　かくて迷宮は彼を迎えし。

――覚醒。目を覚ましたとき、真っ先に見えたのは美しいアオ色だった。思わず目を奪われてしまう程に、青、蒼、あお。しかし、その色に見とれている己に対して、記憶は違和を唱え続けている。脳いわく、お前の自室の天井はこんなに青くねーぞ、と。違和感を噛み砕き、咀嚼し、飲み下したところでようやく気付いた。慌てて上体を起こし、辺りを見渡してみる。周囲には緑の草花が生い茂り、背の高い樹木が壁のように聳え立っている。つまり、森だ。そして、自分は記憶が確かならばゲームをした後時計が午前3時を指していることを確認し、明日の講義に差し支えるからと慌ててベットで寝た筈だ。しかし、依然として周囲は緑に囲まれているし、自分は露に濡れている下草に触れ、その冷たさを感じている。ひやりとしたその感触に、心臓が荒く跳ね上がる。

「夢、か・・・？」

自分で口に出しておいてなんだが、その線は無いだろう。なにしろ、頬を撫でる風の感触や爽やかな樹木の香りがし、意識や視界がこれだけはつきりとしているのだ。これが夢なら現実さえも夢に見えてくるだろう。いや、実際こんな、夢のような現実もしくは現実のよいうな夢、を体感している身としては、これが後者であることを期待したいのだが。残念ながらさっきから左手で抓っている頬が痛くてたまらないことを鑑みれば、これは

「夢じゃ、ないんだろうな・・・はぁ・・・」

特大に重い溜め息をついてみても、状況は全く変わらない。今日の
一限目は出ときたい講義だったのになー、なんて漏らしつつ、立ち
上がる。とりあえずは、人か、町を探して保護を求めねばなるまい。
現在地の森は、とても貧弱一般ピーポーな自分が生活できるところ
ではないだろうし。遭難したときはじっと救助を待つといいらしい
が、今現在の自分はそのケースには当てはまらないだろう。ならば
やるべきことは一つ。

「ひたすら歩くしかない、か。はぁ・・・」

最近は飲み会と講義に追われ、休日をもっぱら課題とゲームだった
のだ。己の体力の落ち具合を心配して、彼は深い溜め息をついた。
不思議と、未知の環境への恐怖はなく、倦怠感だけが彼を支配して
いた。

探索を決意してからおよそ二時間程。すでに彼の心は折れかけていた。

「なんなんだよ、ここ。わけわからんぞ・・・異様にデカイダンゴ虫がいるし、人間サイズのイカが歩いてるし、宝箱落ちてるし、白骨死体とか転がってるし!!!」

と、これら以外にも細々とした奇妙な現象、生物を目撃した彼は驚きのあまりパニックを起こしかけていた。こんなところが地球にあるわけない、てかイカはデカイとめっちゃ怖い、それより白骨死体が怖い、宝箱の中身錆びた短剣だったしよばい、でも護身用にもってきちゃったよヤバイ、てか宝箱とかまるでRPGみたいな、

ふと、そこで思考が止まった。

――RPG？

昨夜のゲームの内容がフラッシュバックする。確か昨日やってたゲームって迷宮系のRPGだったよな、しかも一階層が森の迷宮だった。ダンゴ虫っぽい敵もいた筈、確かオオダンゴムシって名前だ。出てきたときまんまかよ!!! ってツツコんだ覚えあるし。デカイイカも出てきてた、名前はデビルスクイッド、一階で一番強い雑魚モンスターだった筈だ。ってことは・・・

「ここ、ゲームの世界なのかよ……！」

彼の心は碎ける寸前であつた。ここが地球の秘境で、歩いてる内にどこかの村とかに辿り着いて、なんて、心の底に密かに湧き上がつていた淡い希望などが真向から叩き潰されたのだ。ここは異世界ゲームで、地球げんじつじゃない。それがわかつたとき、起き上がつてから今までにため込んで、見ない振りをしていた不安が一気にせりあがつてきた。自分の存在が薄っぺらな2Dにせものではない証明が、この森には無いのだ。なぜならこの森もまた、データによつて組み上げられた存在だから。とにかく人に会いたかつた。あつて、名を名乗つて、自分が嘘の存在ではないことを確かめたかつた。話ができるならこの際偽物だろうがデータだろうがかまわない。彼の恐怖は彼という器から水のように滴り落ち、自我という水面を揺らす。だんだんと足元が覚束なくなり、ついに膝を折る。頭を抱えて震える彼が、ついに崩れ落ちようとしたその時、

「きやあああああああ……！！！！！！！！」

悲鳴が、静かな森に木霊した。彼は顔を上げると、即座に走りだした。己の、存在証明を求めて。疲労を感じせない矢のような速さで駆ける。インドア派で、体力が無い筈なのに。このときすでに、彼はこの世界に取り込まれようとしていたのだ。とある役割を与えられて。そのことを、彼はまだ知らない。

油断は無かった。大迷宮と呼ばれるこの迷宮は、現在確認されている階層だけでも13階層と多く、大陸の各地に点在する小迷宮とは格が違う。と、何度も聞いたことがあったし、ここに来る直前にも冒険者ギルドの職員から耳にたこができるほど聞かされた。そういうこともあって、入念に準備をしてきていたし、一緒に迷宮攻略にきたギルドメンバー達は、自分を含めて皆初心者^{ビギナー}だけでも、今日に備えてかなり特訓していたのだ。なのに。

「あ、ひ・・・ああっ、ひい・・・!!」

それなのに、何故全滅してるんだろう。歯を食いしばって後ずさりしても、歯の根が合わず、カタカタという音と堪えた悲鳴が口から漏れる。握りしめている剣さえ、ともすれば滑り落ちてしまいそうだ。怖い、怖い!! 周囲には仲間の倒れ伏す姿。戦士のマリーは麻痺毒を喰らい、殴打されて気を失った。狩人のタイムは、体当たりを喰らって樹に叩きつけられ血を吐き、そのまま気絶した。唯一無傷な仲間の、後ろにいる学者のカトレアは、私より二つ下なのに古代語魔法を使える凄腕だ。なのになぜ魔法を使わないのか。簡単な

こと、私と同じで歯の根が合わず、詠唱できないのだろう。いや、魔法を使おうともできずに震えているのかもしれない。ならば、

「わ、わたし、が。ま、まもら、なきや・・・」

そうだ、私が守らなきゃ、何のために騎士の訓練を受けたのかわからなくなる。皆を守るために厳しい訓練にだって耐えたんだ、だから、

「きゃあああああああああ！！！！！！！！！！」

衝撃と、悲鳴。彼女の覚悟を嘲笑うかのように、敵はその長い触腕で彼女を打ち据えた。かろうじて間に合った大盾による防御を無いものとして扱うかの如く弾き、あまりの衝撃に彼女は悲鳴を上げたのだ。敵の名はデビルスクイッド、触腕による麻痺の一撃と高い攻撃力で森の一階層において生態系の王者に君臨しているモンスターである。そして森の王者は今まさに、自分のテリトリーへと侵入した不届き者に裁きを下そうとしていた。震える侵入者二匹にめがけて己の腕を振り上げ、

「うらあああああああああ！！！！！！！！！！」

暴君は、横合いから猛進してきていた新たな侵入者に吹き飛ばされた。

ひたすら獣道を走り悲鳴の元に近づいてみれば、そこには女の子二人とイカの姿。普通の状態であつたら彼は突っ込んで行くことはなく、傍観に徹した筈だ。しかし、生憎今の彼は普通じゃなかった。最早視界には女の子達とイカのみ。そして、当初の目的は人間との遭遇、対話。つまり。

「うらあああああああああ！！！！！！！！」

しゃべりたい。しかしイカが邪魔だ。ならぶつ殺す。精神崩壊寸前の彼には理性と怖いものなどなかった。狙いを定めると走りこむスプードをそのままに錆びた短剣を腰だめに構えた、由緒正しき鉄砲玉タツクルによってイカを吹き飛ばし、周囲を見渡す。目についたのは鈍く光る銀。彼は一瞬で判断を下すと

「これ、借りる!!」

「えっ？」

泣きべそをかいている少女の剣を引っ搦んでぶん獲りながら再び疾走。起き上がりつつあるイカに向けて、横薙ぎに渾身の一撃を放つ!!

「っづああああああああ!!」

獣の如き咆哮とともに振り切られた剣はその切れ味を遺憾なく発揮し、森の王者をあっさり一刀両断に伏した。それと共に勢い余った彼はすっころび、顔面強打の後地面を三回転してようやく止まった。しばしの沈黙。

「あ、あのう・・・」

あまりの事態に茫然としていた少女達だが、助かったことには変わらない。内心で安堵の溜め息をつきつつ、イカを屠った青年に慎重に声をかける。すると、顔を抑えてうずくまっていた青年は、パッと顔を上げ口を開いた。

「あ、ああ。何？」

クールぶっている顔を上げた青年からは、だらだらと鼻血が迸っていた。あまりの酷さに少女の顔が一瞬引き攣る。

「・・・あの、お顔は大丈夫なんですか？」

あまりの惨状に騎士が尋ね、それに合わせて学者も首を縦に振る。それに対して大丈夫、と答えた青年は（その割にはまだ鼻を押さえていたが）再び口を開き、

「とりあえず、ここを離れないか？」

と提案。対する二人もそれに乗り、ひとまず迷宮をでて街に向かうことになった。倒れているパーティーメンバーを騎士の少女と青年で背負うと、一向は会話もなく迷宮から帰る道を辿って行った。なにせ、お互いになんと声をかけたらよいかわからなかったのだから。

そうして森を三十分ほど歩けば、迷宮の出口についた。迷宮の入口近くにある衛兵の詰所兼救護所となっている施設に怪我人を運び込むと、一同はほっと、息をついた。すると騎士少女がなにかに気づいたように口を開く。

「そういえば、自己紹介とお礼がまだでしたね。私はオリーブといいます。ギルド《グロリオサ》のギルドマスターで、騎士^{ナイト}のジョブを務めています。私達全員の命を救ってくださったこと、深く感謝します。ありがとうございました!!」

オリーブは、騎士に相応しい上品な物腰で、しかし感謝の言葉は念

を押すように力強く述べた。それについて、隣の少女も口を開く。

「カトレア、です。あの、その、あ、ありがとうございましたっ！
」

それだけ言うと、カトレアはオリーブの後ろに隠れてしまった。どうやら人見知りをする方のタイプらしい。そして次に、青年はようやく当初の目的を達成できるという喜びを噛みしめながら、己の名をこの世界で初めて言い放った。

「俺の名前は三隅^{みすみ こう} 香だ、コウでもミスミでも、好きな方で呼んでくれ。」

にっこりと笑顔を添えての自己紹介。なにせ、オリーブは綺麗な金髪を頭の高い位置で結い上げている、上品さと活動的な空気を併せ持つ美少女だ。カトレアも、紫のゆるいウェーブのかかったロングヘアに愛らしい顔立ちをした美少女である。人、それも美少女に会えたことでテンションが上がっているため、勢いのままかっこつけて自己紹介したコウだが、残念ながら乾いた鼻血が顔面にこびりつき悲惨なことになっていた。その証拠に、彼の顔を見たオリーブは一瞬怯えたし、カトレアに至ってはすっかりオリーブの背に隠れてしまったくらいだ。それはともかく、ようやく青年はこの世界に名を乗り、そして人知れず世界は青年を己の一部と認めた。これから彼を待ち受ける運命は如何なる動きをみせるのか。それは、神の^{せかい}みぞ知ることだろう。こうして、後の世に末長く称えられるであろう彼の物語は、締まりのない始まりを見せるのであった。

迷宮之巻　かくて迷宮は彼を迎えし。　（後書き）

はじめまして、月海苔つきのりと申す者です。初執筆だったのですが、いかがでしたでしょうか？誤字、脱字、誤用があればこっそり教えて貰えるとありがたいです。はい。それでは、続きをかければまたお会いしましょう。では。

迷宮之式 客人、冒険者となる。

現在、衛兵詰所兼簡易救護室は、混迷を極めていた。原因は三名の人物、うち一人は青年、血塗れの顔面をそのままに救護室のベンチに座り込んで青い顔を（実際は乾いた血で蝦茶色だが）して俯いている。もう一人は少女、胸部ブレストと腰部スカートを装備した典型的な冒険者だ。こちらも青い顔をしてぶつぶつと

「私のせいで、わたしのせいで、わたしの、」

などと呟いている。超怖い。そしてもう一人は、

「じーーーーーっ」

見てる。こっち見てる、超見てる。助けを求める視線を横顔に感じながら、衛兵派出所、迷宮支部勤務のストック（26歳、妻子持ち。好物、妻の手料理。）は、冷や汗を掻きつつ無視した。だって怖いんだもん、あの雰囲気につつまむの。ローブ姿の少女の視線を感じつつ、彼はまだ陽が高い位置にある空を仰いだ。ああ、帰って妻と娘の顔が見たい。そう思いつつ、背後の扉が軋む音を聞いて彼は希望を感じた。背後に現れたのは迷宮支部専属の医学者ドクターだ。彼はこの

状況を打破してくれる唯一の可能性に、問いかけた。

「どうでした、負傷者の具合は？」

「なに、たいした治療じゃ無かったよ。イカの傷や毒は一層で壊滅して帰ってくる冒険者の典型的な例の一つだから、治療しなれている。しかも、イカにやられたにしてはずいぶん傷が浅かったから、夕方までには目を覚ますだろう。」

その言葉を聞いた瞬間、鎧姿の少女がパツと明るくなり、ローブ姿の少女はほっと息をついた。衛兵に福音を告げたドクターはゆったりと歩きつつ肩に掛けていた手ぬぐいを青年に放り投げて、顔をふきたまえと忠告して去って行った。この状況を打開してくれたドクターに対して感謝しつつ、衛兵は、夕方にまた来るといい。と言いつ放ち、陰鬱な冒険者どもを救護所の外へ追い出すのであった。エリカ、パパは頑張ってるぞ。サイネリア、今日は早く帰るよ。愛する娘と妻に念を送りつつ、彼は仕事に戻るのであった。

一方、救護室の外に出た三名は困った顔でお互いを見た。青年、コウは一旦落ち着いたことによって今の自分に起こっている現象について考えていたのだが、あれよあれよという間に日差しの下へと放り出され、考えが纏まらなくなってしまった。彼の推測が確かなら、この世界はゲームの世界だ。名前と職業ジョブを決めた六名のキャラを新生ギルドのパーティーとして、パーティー単位で主人公として扱い進める感じのゲーム。典型的なウィザードリイタイプの迷宮ゲーにおまけ程度のストーリーがついたモノというのが彼の認識だった。が、今に至ってはそんな知識は役に立たなかった。というか役に立ちそうな知識など彼は持ち合わせていない。なにせ、ゲームはこれから進めますよというところで、現実になってしまったんだから。ありえねーよと叫ぶ自分を押し殺しつつ思考を回すが、彼の脳みそはニートを決め込んで一切打開策を提示しなかった。すると、

「あの、そろそろお顔を拭いた方がよろしいですよ？」

鈴が鳴るような声が聞こえて横を見ると、困った顔をした少女、オリブと目が合った。その横ではローブの少女、カトレアも勢いよく首を振っている。俺の顔ってそんな汚いの？と聞くと、曖昧な笑みが返される。そんな事実になんか落ち込みつつ、さっきの医者風の男に貰った手ぬぐいで顔を拭くと、即座に手ぬぐいから乾いた音が聞こえた。驚いて手元を見ると剥がれ落ちた血の塊が手ぬぐいに張り付いており、コウは危うく腰を抜かすところだった。そんな彼の様子を眺めつつ、顔があんまり怖くなく、むしろややかっこいいこ

とに安堵した二人組がいたことを、ここに記す。そして、コウがさっぱりしたところで再度オリーブが口を開いた。

「あの、それですね、コウ殿。あなたさえよければ、私達からお礼がしたいので、着いてきて頂けないでしょうか？」

「えーっと、別にお礼とかいいよ、ホント。お礼が欲しくて助けたわけじゃないしね。」

嘘だ。できることならばお礼として助けてほしいのが本音である。しかしそれを先に言わないのは、悲しきかな、日本人の持つDNAが彼に謙遜という行動を取らせているのだ。人間は危機に陥ったとき、日常的な行動を取ろうとする傾向にある。つまりところこの男、テンパっているが故にこんなことを言い放ったのだ。無論、心中は大荒れである。言語化するならば、

「ふざっけんなあああああああ！マジでありえん、俺ってばイカれてるぜ！！なにがお礼とかいいよ（キリッ）だよ！！死ぬ！俺死ぬ！！ってかほっとしても俺いずれ死ぬじゃん！！！！ジーンズ！！神様たすけてえ・・・。」

と、いったところだろう。ちなみに彼は無宗教だ。しかし、彼を救ってくれる神はいて、以外なところから助け舟を出してくれた。

「あの、でも・・・、お兄さん、背囊とか持ってませんよね。服も見たことないモノですし、遠いところから来たんじゃないですか？知り合いが近くに住んでたりするんですか？」

その助け舟とは、カトレアだった。沈黙するコウを見かねて声を掛けてくれたらしい。彼女に続くようにオリーブにも説得されたコウは、内心ほっとしつつも彼女達に従うのだった。ちなみに、謙遜は良い方に捉えられたらしく、二人のコウに対する印象は、ヌケてるけどいい人。という風になっていた。本人が聞けば喜びつつ落ち込むだろう。知らぬが仏である。

「なるほど。それで荷物も無しに迷宮にいたのですか。なんというか、大変でしたね・・・。」

そんな言葉をオリーブに言わせたのは、コウである。目的地である彼女達のギルドに行く道程で、何故裸一貫で迷宮にいたのかを聞かれたコウは、焦りつつもカバーストーリーをでっち上げたのだ。内容は単純なモノで、とある東の小国の出身である彼は、冒険者に憧れてこの国に来たが、悪辣な冒険者崩れに騙されて荷物を奪われ、迷宮に放り出された。そんなときに、悲鳴が聞こえたので駆けつけた。という、微妙なストーリーであった。が、どうやら二人の同情を誘うことには成功した様だ。オリーブはむっとした表情で、許せない、非道な行為です！と居もしない悪党に対して怒りを燃やしているし、カトレアは、お兄さん、元気出してくださいっ！と、涙ぐみつつこちらを励ましてきた。それに対して罪悪感を覚えつつコウが苦笑いをしていると、ふいに宿屋のような建物に着いた。扉を押し開き中に入ると、宿屋の女将らしい恰幅のいい女性が三名を迎えてくれた。

「あら、オリーブちゃんにカトレアちゃん、お帰りなさい！って、あらあら、オリーブちゃんったら財宝じゃなくて男の子持ち帰るなんて！！やるじゃない！！」

「なっ！！ち、違います！コウ殿にはお世話になったからお礼をしようとして連れてきただけですっ！まったく、メイさん？」

「わかったわかった、悪かったね。で、コウちゃんだっけ？あたしはメイ、見ての通りココの女将さ。泊まってくなら後で声かけてち

ようだいよ？」

唐突にオリーブをからって真っ赤にしつつコウに声を掛け去って行った女将。すごい人だと思いつつコウは宿の二階の一部屋へ案内された。部屋にあるテーブルを三人で囲み、腰かけてからオリーブが喋りだした。

「ここに来るまで話はあらかた聞きましたが、そんな事情があるのなら、尚更放って置けません。それですね、コウ殿。提案とお願いがあるのですが・・・」

と、そこまで喋って一息つき、コウの目を見つつ、オリーブは再度口を開いた。

「単刀直入に言います。コウ殿、私達のギルドに入っていただけないでしようか!？」

「・・・え?」

なんとも以外な展開であった。オリーブは身を乗り出してこちらを見つめているし、カトレアは固唾を飲んで状況を見守っている。とりあえずコウは、理由を聞くことにした。

「なんで、俺を君達のギルドに？それに、提案なら分かるけど、おねがいって？」

「それは、あなたが身ひとつで頼れるものが無いということと、冒険者になるのが目的であるということ鑑みて、です。お願いというのは、そこに私達の事情が関わってくるのですが・・・」

そこで一旦言葉を切ったオリーブ。その横からやや悲壮な調子でカトレアの声が飛ぶ。

「実は、わたしたちグロリオーサは、人員不足で困ってるんです。」

以外だった。見た目が可憐な少女達がいるのだから、それを誘蛾灯にすればいくらでも男なら引っかかりそうなモノだが。しかし、揃いも揃って疲れた顔をした少女達は幾分か低い声で話を続ける。

「私達グロリオーサは、今日の探索にでたパーティーメンバーが、そのままギルドメンバーなんです。命からがら帰ってきたことから分かると思いますが、実を言うと全員が初心者冒険者なんです。」

「しかも全員女の子なんです。だから皆から弱そうだと思われて、人が全然集まらないんです。でも！そこでお兄さんが現れた！！」

妙に力の入った語調でカトレアが告げる。お、俺？と、戸惑いつつ返すと、オリーブが深く頷きつつ語る。

「はい、あなたです。私達のパーティーは現在四人。迷宮の道幅などを考えると最大五人程度が普通の冒険者パーティーなのですが、現状では一人足りない。そこに、コウ殿。あなたが入ってほしいのです。人柄は今まで見させて貰いましたが問題ないですし、実力も、不意打ちでしたがあのデビルスクイッドを倒す程にある。しかも、私達に今必要な前衛であるという条件もクリアしている！どうでしょう。ギルドに入って頂けないでしょうか！？」

「わたしからも、お願いですっ！お兄さんなら怖くなさそうだし、それに、お兄さんの困ってる理由も解決できるんだよ？ダメ？」

こちらを見つめる少女達は真剣な眼差しでコウの動向を見ている。おそらく、俺を助けたいという理由と、人員不足という理由はどちらも本当なんだろう。と、そこまで考えてから、コウは思考を手放した。なにせ、最初から答は決まっているのだから。人としてこんなに求められているのは嬉しいし、それが美少女なら尚更。それに、現実的な問題として、無一文の無職では生きていけないというものもある。つまり。

「分かった。俺でいいなら、君達のギルドに入れて貰いたい。」

そういうことである。答えを聞いた瞬間、コウの目の前の彼女達は手を取り合って喜びあい、それを見たコウにも自然と笑みが浮かんだ。それから少し間をおいてから、改めて挨拶をした。

「では、改めて。ギルドマスターのオリーブです。よろしく願います、コウ殿。」

「パーティーの後衛をしています、学者^{セージ}のカトレアです。よろしくです、お兄さん！」

「ああ、よろしく、二人とも。ところで、質問なんだけど。」

ふと、コウに疑問が湧いた。自分が入ることを仲間に聞いてから採決を取った方が良いのではないかと。それに対する答は、

「いいんです、彼女達もずっと新しいメンバーを探してましたから。

」

とのことだった。そうこうしている内に時間は経つもので、太陽はすでに中天から傾き始めている。三人は宿を出ると救護所に向かうことにして、歩き始めたのだった。

迷宮之式 客人、冒険者となる。(後書き)

おはこんばんにちは、月海苔です。今回は冒険者になる経緯でした。やや冗長だったでしょうか？ちなみに関係ないことですが、キャラの名前は全部植物から取っております。一応ギルド名も。暇でしたら調べてみても面白いかもしれません。と、蛇足でしたね。それでは、またお会いしましょう。では。

迷宮之参 備えあれば憂い無し。

燦然と輝く太陽が照らす石畳は、そこに暮らす人々の生活をその身に刻み、擦り減り、道行く人に歴史を感じさせてくれるような、穏やかな風合いのくすんだ白に染まっている。海に程近いこの街の壁は漆喰で白く輝いており、それが、目が覚めるような青い海や空、時折見える並木の緑をより一層際立たせているようだ。美しい、まるで絵画のような世界だが、そこに一つのエッセンスを加えることによって、良い意味でこの世界は絵画足りえなくなる。それは、何か。

「いらっしゃい！！今日は水揚げされてから間もない魚ばかりだから、新鮮でおいしいよ！！今日の昼飯に一匹、今日の晩飯に一匹。ウチの魚を買っていっとくれー！！！！」

「おう、その坊ちゃん嬢ちゃん！！隣の魚屋は大したことないぜ、昨日は売れ残りを自分の晩飯にしてたくらい売れてなかったしな！！その点ウチは鮮度よし、ツヤよし、味よしの野菜がたくさん！！今日の晩飯はウチの野菜を使っとくれよな！！」

「て、てめえ！！言ったな、この！！一昨日は赤字だなんだって騒いでカミさんにげんこつ喰らってたくせによお！！この、菜っ葉くせえハゲ親父が！！！！」

「い、言ったなこの蛸坊主!! もう我慢ならねえ!!!! 今日こそは決着つけてやんよ!!」

「あんたたち、うるさいよ!! 客の前でなにやってんの!!!!」

「うへえ、ごめんよ母ちゃん!!!!」

賑わい、である。色とりどりの布を使った鮮やかな屋根に、これまで色とりどりの商品が並ぶ市場は、美しい街並みに命を吹き込むかのように騒がしく、活気があった。ルピナス小国連合に周囲を囲まれ、しかし独立した国家のように扱われている都市にあるこの街は、大迷宮という人を惹きつけてやまない要素の他にも、とても魅力的な要素の詰まった街である。迷宮都市、ブーゲンビレアの城下街。なお、観光の際は迷宮王ヴェロニカ・ヴィクトリアスの時代に建造され、今もこの街の権威を司る王族が住まう王城を見ていくと良いだろう。君はそこで都市一番の可憐さを誇るといふネリネ・ヴィクトリアス王女を探してもいいし、探さなくてもいい。と、まあこの街に関してはこの様な雑誌などに載っていますので、暇ができれば読んでおくといいですよ。」

そう言って雑誌、『ルピナスうおゝかゝ春の観光特集』を閉じたのはオリーブだ。救護所に行く前に寄る所があると言うので、目的地までの雑談がてらに街の話をしていたのだが、途中からどこからと

もなく雑誌を取り出し説明し始めたのだ。どうも彼女はこの街が相当好きらしい。なにせ話をしていると時の彼女の目は輝いていたから。途中でハゲ親父どもの喧嘩に遭遇しても動じることなく話していたのを見て、焦りつつコウは二重に驚いた。この世界に雑誌があるということ、オリーブの語る世界観が知っているゲームのものとは少し違ったからだ。コウが知っているこの街の背景事情^{せつてい}では、迷宮都市ブーゲンビレアは王政では無かったのだ。まあ、その事實はコウの現状に直接作用するわけではないのですぐに記憶の底へ沈んだが。この辺りに彼が今までどれだけいい加減に生きていたかが滲みでているが、残念ながら人を疑うことをあまりしないオリーブとカトレアはそれに気づかなかった。それはともかく三人は市場を進み、大きな店の多い場所へ抜け出た。そこで、人混みに流されなように注意し、口数の少なくなっていたカトレアが口を開いた。ちなみに彼女はコウの胸あたりまでしか背が無い。

「やっと抜けました、ふう……。さて、お兄さん。お兄さんはグロリオーサに入り、冒険者になりました。ですが、お兄さんには迷宮に挑むにはまだまだ足りないものが多いのです！それがなにか分かかりますか？」

「え？・・・うーん、き、気合とか？」

バカ丸出しの解答である。しかし、そんな解答にもめげずにカトレアは続ける。

「ズバリ、お兄さんに足りないものは装備です。今の異国の装いで冒険者には見えませんから、装備を揃え、その上で私達の仲間に会ってもらいますよ。さっきは大丈夫と言いましたが、実は仲間に一人気難しいお姉さんがいるですから……。」

とのことらしい。まあ、灰色のスウェットパンツと無地のTシャツで戦う冒険者なんていないだろうからいいのだが、一つ問題があった。

「や、それは良いんだけど、さ。装備ってお金いるでしょ？俺、今お金無いんだけど……。」

つまりそういうことだ。現在無一文で暫くヒモ野郎決定な身としてはこれ以上借金を増やしたくないし、コウの心情としては優しい彼女達に迷惑を掛けたくないのだ。しかし、そんな彼に対してオリ―ブは笑顔で話しかける。

「コウ殿、大丈夫です！実を言うと私達、人は足りていなくても、お金では困っていないんですよ。」

そう言って彼女が取り出したのは巾着袋。その中には大量の銅貨、銀貨、金貨があった。咄然とするコウを差し置いて少女達は本人そ

っちのけでコウに似合う装備を考え、はしゃいでいる。こと買い物という一点において、女は男よりも強い。この法則は、どうやら異世界でも同じらしい。

夕方。街は夕日の赤に染まり、市場も閑散としている。遊びまわる子供たちは家路につき、穏やかな静けさが街を包んでいる中、三人は救護所に向かっていた。

「しかし、装備を整えると人の印象も変わるものですね。先ほどまでのコウ殿は優しげな雰囲気でしたが、今のコウ殿にはこう、凛々しいといった印象を受けますね。」

そう告げたのはオリーブだ。満足そうにコウを見ている彼女のプロデュースで装備を固めたコウであったが、見た目にはなかなか冒険者らしさ、とでも言うべきものが漂っている。鉄製の胸部鎧プレストに、黒色の丈夫そうなワイドパンツと同色のブーツで足元を、腕は肘までの革製手甲レザーグローブで固めている。腰元には幅の広いベルトに吊るした片刃の長剣があり、より強く彼の冒険者らしさを演出しているように見

える。が、それら全ての調和を崩すかのように表情が死んでいた。なにせ、一時間以上着せ替え人形にされた挙句、武器を選ぶ段階では延々と剣やら槍やらを振らされていたのだから。彼と彼の上腕二頭筋は休息を欲しており、しかし、今のところ望むものは与えられそうになかった。そうして少女二人、半死体一名で歩いている内に救護所へと着いた。そこで直立している衛兵は三人に気づくと一瞬間嫌そうに顔を顰め、彼等の中に案内した。救護所内の病室に入ると、木製のベットの上で欠伸をしている少女と、貧乏揺すりを繰り返している少女がいる。二人はこちらに気づくとそれぞれ笑みと顰め面を浮かべた。

「お、お嬢様！！！！！嗚呼、すいません、お嬢様を守るのがわたしの使命ですのに、この様な無様を晒してしまふなんて・・・！！！！！！この失態の罰がどんなものであらうと、タイムめは耐えて見せますッ！！お嬢様、どうか愚かなわたくしめに罰をくださいまし！！！！！！」

まず口火を切ったのは貧乏揺すりをしていた方だ。大げさかつ芝居がかった仕草でオリーブの足元に縋りつき、苦痛の表情を浮かべている。その情景に苦笑いを浮かべているカトレアとあっけにとられているコウに、声がかかった。

「お、そっちの兄ちゃん是谁なんだ？見た感じ冒険者っぽいけど、どういう知り合い？」

そう言って近づいてきたのは欠伸をしていた方の少女だ。日に焼けた小麦色の肌に長い焦げ茶色の髪が南国の人々を思わせる美人だ。均整のとれた肢体を皮の胸当てと巻きスカートで包んでおり、腰には何色かの腰布と紐飾りを巻いている。胸下から腰までに布地は無く、括れを強調するような色気のある見た目と裏腹に、口調や笑顔がカラッとしていて少年のようである。そんな彼女の問いに答えるべく、オリーブは足元の少女を引き剥がして話し始めた。

「まずは、全員無事に帰れたことを喜びたいと思います。タイムも、マリーも、傷が深くなかったのは幸いでした。さて、コウ殿、こちらの二人が残りのギルドメンバーです。手前にいる方がマリー、床に座っているのがタイムです。で、こっちがコウ殿。私達を救ってくれた恩人であり、そして・・・」

オリーブはそこで言葉を切り、大きく息を吸ってから口を開いた。

「なんと、グロリオーサ待望の五人目のメンバーになってくれた方なのです！！！！」

その言葉に対してマリーは喜び、タイムは微妙な表情を作った。そして、彼女はコウを睨みつけて吠える。

「お嬢様！！なぜ、こんな男をギルドに迎えるのです！？わたくしは反対ですわ！！」

その言葉に対してコウは驚いたが、他のメンバーはやっぱりといった顔をしている。そんな中、オリーブはタイムを説得に掛かり、ギャンギャン吠える彼女とオリーブの会話を聞き流しつつ、コウはふと疑問に思ったことを聞いてみることにした。

「なあ、カトレア。オリーブとあの娘って、どういう関係なんだ？お嬢様ー、とか言ってたけど。」

「実を言うとオリーブさんは、さる名家のお嬢様なんです。タイムさんはその従者で、何と言うか、その、すごくオリーブさんのことが好きで、オリーブさんに近づいてくる男の人を嫌ってるんです。それで、何かしら理由を付けてお兄さんを批判すると思ったから先に装備を整えたんですよ。」

そう言うとかトレアは溜め息をついた。どうやらグロリオーサの不足の原因にはタイムも関わっているらしかった。そこへ、オリーブがタイムを伴い寄ってくる。タイムはコウの前に出ると、不満だらけです、といった表情で

「・・・狩人^{ハンター}のタイム、ですわ。これからよろしくお願いします。
それとお嬢様に手えだしたら容赦しませんから、それだけは心に刻
んでおいてくださいまし。」

と告げた。金の巻き毛は豪奢な雰囲気を出しており、口調も相まっ
てオリーブよりどこぞのお嬢様に見える。ただ、そんな印象を裏切
るように濃緑の軍服の様な服を着ており、それが彼女の印象を大き
く変えていた。そんな彼女に乗っかるようにマリーも自己紹介をす
る。

「あたしはマリー、前衛^{ファイター}で戦士のジョブをしてる。ま、よろしく頼
むよ!」

「ああ、よろしく、二人とも。俺はコウ、好きな呼び方で呼んでく
れ。」

よろしく、と返してくれたのはマリーだけで、タイムはそっぽを向
いている。なるほど、気難しいお姉さんとは彼女のことだったのか
と思いつつ、ちょっとだけムツとするコウであった。

とりあえずの自己紹介を済ませ、救護所を出たグロリオーサの面々はメイの宿屋に向かって歩みを進める。太陽はすっかり沈んでおり、しかし、酒場や小料理屋のある辺りはまだ明るい。これは、迷宮から帰ってきた冒険者達が屯しているからだ。そんな一画にあるメイの宿屋の一室で、コウはベットに転がりながら天井を見つめていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今、彼の中には様々なモノが渦巻いていた。不安、期待、興奮、緊張、そして、疑問。波乱の一日が終わりこうして一人になってみると、やはりこれは夢ではないのかと考えてしまう。どうしても、帰れるのではないかと思ってしまう。しかし、現実^{りせい}は彼に残酷な今を示し続けているし、ソレに立ち向かわなければ彼は生きていけない。寝返りを打ち、机の上に置いた剣をじっと見つめる。この世界において、月光に輪郭を浮かび上がらせているソレだけがコウの頼りだった。疲れ切った体は安息の闇にコウを誘い、瞼が落ちる。明日は迷宮に挑むと聞いていたので、早く眠った方がいいだろう。そう判断したコウは、睡魔に身をまかせ、ひと時の休息を得るのだった。

迷宮之参 備えあれば憂い無し。(後書き)

おはこんにちばんわ、月海苔です。さんざん迷宮迷宮書いてるのに、三話になっても迷宮に入れません。戦闘なんて一回しかしてないです。うーん。しかし、次回は多分迷宮に入れると思いますので、よろしければ海苔野郎のクドイ文章にお付き合ってくださいまし。では、また次回に。

迷宮之肆 勝利は美酒よりも甘く。

寝返りを打つと、不意に差し込んだ陽の光に眼が眩んだ。思わず閉じていた瞼をさらに瞑り、顔を顰める。安穩とした微睡に身を任せつつ、今日の予定に思いを馳せる。確か今日は大した予定は無かった筈。いや、午後から講義入ってたっけ？じゃあ昼まで寝るかな、とそこまで考えたところで。いつもはカーテンを閉め切って寝るのに陽光が顔に当たるはずなど無いことに気づいた。一気に意識が覚醒し、跳ね起きると。

「・・・はあ。」

朝一番に口からでた言葉は、特大の溜め息であった。コウの異世界生活は当たり前のように二日目に突入していた。本人の意思を無視して。

宿屋で朝食を済ませ（普通の洋食であった）、グロリオーサのメンバーと合流してまずは冒険者ギルドに行くことになった。なんでも、迷宮の内部に入り、探索をするのには国営冒険者ギルドの許可証がいるらしいのだ。そんなこともしりませんか？とでも言いたげなタイムの視線をスルーしつつ、コウ、カトレア、マリーの三人でギルドへ、残りの二人は探索の準備をすることとなった。朝の活気ある市場を通り、装備を買った職人区画を過ぎた所に冒険者ギルドはあった。なるほど、国営の名に相応しい大きさである、とコウは関心した。この街では珍しいと言える三階建ての建物は、多くの人が出入りしている。そのどれもが武器を下げ、鎧を着こみ、これから始まる冒険に眼を光らせて期待している。大学のキャンパスとは違った活気だ。と、周囲を眺めていたところでマリーに首根っこを掴まれた。

「ちょっと、あんまりキョロキョロしてると変なのに絡まれるよ？」

とのことだった。慌てて伏し目がちに周囲を確認すると、朝から飲んだくれている（ギルドの一階は酒場も兼ねている）破落戸風の冒険者が数人、喧嘩の相手を探すように周囲を見渡しているのを見て冷や汗が出た。あのままだと絡まれていたかもしれない。マリーにお礼を言いつつギルド内に入り、受付嬢のいるカウンターに向かう。

「いらっしやいませ、冒険者ギルドにようこそ！」

「あの、冒険者登録をお願いしたいんですが。」

「はい、冒険者登録ですね？かしこまりました。では、こちらのカードを握って、自分の名前を思い浮かべてください。」

そう言って差し出されたのは一枚の金属製のカードだった。言われた通りに握り、名前を思い浮かべると淡い光が握りこんだ手から出ている。手を開くと、そこには細々とした記載があるカードが出来上がっている。コウにはどういった仕組みなのかさっぱり理解できなかった。

「カードに記載は浮かびましたか？・・・はい、冒険者登録を確認しました。ギルドランクF、グロリオーサのコウ様、ジョブは剣士ソードマンです。これから、がんばってくださいね？」

励ましの言葉と共に手渡されたカードには、自分の顔と所属ギルドが大きく書かれている。裏面には再発行の際には銀貨一枚が必要です。などの、利用に際した注意が書かれている。クレジットカードのようだと思いつつソレをズボンの収納スペースに仕舞うと、後ろから大きな声が聞こえた。何事かと思いい振り向くと、先ほど見掛けた破落戸共が一人の冒険者に絡んでいた。

「おいおい、カタナなんかぶら下げちゃってよう、一端の冒険者気取りかよお嬢ちゃん？」

「・・・気取り、では無い。私は冒険者だ。」

対峙しているのは二人の人物。一人は飲んだくれの破落戸で、明らかに行き過ぎた酒量を摂取しているのが見受けられる。もう一人の人物は少女、緋袴に太刀を下けている、黒髪の美しい少女だった。周囲を破落戸の仲間が取り囲み囃し立てている中、少女の表情はピクリとも動いていなかった。しかし、それは怯えているからではなく怒りを抑え込んでいる故の風であると、気づけなかったのが破落戸共の失敗だった。さらに少女を煽ろうと破落戸が口を開いた瞬間少女の手元がぶれた。瞬き程の時間が経つと、破落戸は酒場の壁にぶつかり伸びており、少女は何事も無かったかのように立ち去っている。もはや彼女の道を塞ぐ者は居らず、その場にいる誰もが彼女に畏怖の念を向けていた。

オリーブ達とは迷宮前で落ち合うことになっていたので、三人は雑

談をしつつ迷宮へと向かっていた。もちろん、話題は先ほどの少女のことだ。まず、コウが口を開いた。

「しかし、さっきの女の子すごかったよな。こう、手がぶれたって思ったら破落戸が吹っ飛んでさ。」

「ああ、ありゃ当然だね。酒場で管巻してる破落戸程度が、冒険者ランクAの人間に勝てるかよっての！」

「そっか。ちなみに、冒険者ランクって？」

「え？」 「え？」

なにそれこわい。ではなく、以外だという表情をしたマリーに変わり、カトレアが答える。少女曰く、冒険者ランクとは冒険者の強さや有能さの目安になる値らしい。迷宮を一階層突破したとか、特別な魔物を狩ったとか、珍しいアイテムの発見とか様々な理由で上昇するらしい。ちなみに、ギルドに加わっている冒険者は個人のランクではなくギルドのランクがカードに表示されるんだとか。ぼやっとした表情で聞いているコウだったが、ふと疑問が湧いた。

「冒険者ランクのことは分かったけど、さっきの娘のランクを知っ

てるのはなんでなんだ？」

ああ、それは・・・と、マリーが口を挟む。

「有名人だから。この一言に尽きるね。さっきの破落戸は知らなかったみたいけど、《首切り》ヒナギクって名前はこの街の冒険者なら誰でも知ってるもんなんだ。」

「へえ・・・。」

あんな美しい少女にそんな物騒な名前があるとは・・・。と、戦慄するコウだった。どうやらこの世界では見た目なんて信用に値しないようだ。そんな会話をしていると、いつの間にか迷宮前に着いていた。こちらを見つけたオリーブが小さく手を振っている。合流し、各々にアイテムを配分しつつある程度の作戦を決める。コウは傷を回復させるポーションを二本受け取った。鮮やかな緑色の液体は現代日本人としては健康被害が気になるところだ、着色料的な意味でまあ、ファンタジーだから大丈夫だろうけれど。そんなことを考えつつ隊列を組む。前衛はコウ、オリーブ、マリー。中衛にカトレア。後衛にタイム。といった、矢印型の隊列だ。これには勿論意味があり、中衛のカトレアを前衛で守り、タイムが敵の足を止めてからカトレアの魔法を命中させるといった作戦だ。ちなみにタイムは背後からの急襲を警戒する役割も持っている。お嬢様の背中はおたくしを守りますわ！！と、当の本人は張り切っていた。

迷宮の道は広く、美しい自然と背の高い木々が醸し出す荘厳な気配が人を不思議な気分誘う。警戒をしつつ進む一行は、不意に足を止めた。右手前方の茂みに怪しげな動きを察知したからだ。盾を持つオリーブが前に出て剣を抜くと、茂みから人間大の影が飛び出してきた。ソレは触腕をくねらせつつこちらに向かってくる。オリーブは自分の頬を伝う汗を感じた。前回は緊張して碌に抵抗できなかったが、今日は違う。大きく息を吸うと、気合と共に声を張り上げた。

「作戦開始ッ！！」

声に反応して飛び出したのはマリー、両手に握った槍を鋭く突き出し、イカを脇から刺すと即座に後退する。マリーの動きに一拍遅れてイカの腕が地を叩き、土くれが周囲に散らばった。意識がマリーに逸れたのを感じると次にコウが飛び出した。その動きに対してイカが腕を薙ぐが、コウは大きく飛びのいて回避した。そこに、

「はあああああ！！！！」

咆哮と共に盾ごと突進したオリーブのチャージが炸裂した。鈍い音と共に倒れたイカに対して風切り音を伴った矢が刺さり、その腕を地に縫い止める。タイムの弓撃によって身動きのできないイカがもがく中、朗々と聞こえてくるのは詠唱だ。

「鉄と大地で火花を散らせ、其は紅きもの、揺らめく陽炎!!」

カトレアの手握られた杖の先に赤い光が灯り始める。ソレは次第に膨らみ、輝き、

「汝、焦熱の刃! フレイム!!!!」

解き放たれた。指向性を持った炎の刃はイカを包み込み、一瞬で焼きイカと化した。食欲をそそる香ばしい薫りが立ち昇り、辺りに広がり始める。オリーブは剣を収め、グツと手を握りこんだ。そう、自分達はあれほど苦戦した相手に勝ったのだ。無傷で。その場の全員が勝利に喜び、怪我無く勝てたことに安堵するのだった。一方コウは、自分が全然活躍していないことに密かに落ち込むのであった。

初勝利から数時間、グロリオーサの面々は探索を切り上げ、帰路についていた。それぞれが疲れを見せつつも満足そうな表情をしている。そんな中、コウは難しい顔をして考えこんでいた。探索の途中、

何度かモンスターと遭遇し、戦闘したのだが、その時に疑問が湧いたのだ。自分はこんなに身体能力が高かったか、と。コウは大学に入ってからはずっと運動に縁がなかったので、体力は落ち気味だった筈だ。それが、この世界に来てからは妙に体力があるし、腕力だって剣を容易に振れるくらいにはある。何かしらの補正があったとして、その正体は一体何なのか、そこまで考えて、コウは思考を放棄した。思考していられる状況ではなかったからだ。

「え、ちょ、あの、マリー、さん？」

「んー？ つれないね、マリーって呼び捨てでいいよ、一緒に戦った仲だろ？ あたしもコウって呼ぶしさ！ それよりコウ、あんたなかなかやるじゃん！ さっきのダンゴムシの時も、」

「いや、そうじゃなくて、」

胸が当たってるうううううう！！と、コウの脳内は肩を組んできたマリーの偉大なる双丘に全身全霊で意識を裂いていた。その様子を見て取ったマリーは、

「ん？ ああ、これ？ 大きいっしょ？ でもねー、鎧で見えないけどオリーブもなかなかのモノ持ってるよ、気になる？ 気になっちゃう？」

嬉々としてからかい始めた。それを聞いて真っ赤になったオリーブ

はマリーの名を怒鳴りつつ追い回し、カトレアは己の胸元を見て落ち込み始める。タイムはここぞとばかりに冷ややかな視線をコウに突き刺してくるし、散々である。だが、

「楽しい、な。」

そう、楽しい。こちらの世界にきてから今までで、ようやく肩の力が抜けたような気がする。このメンバーと居れば、見知らぬ世界も楽しく生きられそうだ。心に温かいものを感じつつ、コウは真っ赤になっているオリーブを宥めにかかり、平手打ちをもらうのであった。最後まで締まらない男である。

迷宮之肆 勝利は美酒よりも甘く。(後書き)

おはにちばんわ。月海苔です。やっと迷宮に入れましたよ！戦闘もしたよ！えらいもっさりした戦闘でしたが。ここまで（四話まで）が序章、プロローグみたいなもんで、説明っぽい文が多かったです、ここからは多分サクサク行けると思います。多分。それでは、また次回に。

迷宮之伍 汝、恐るるべからず。

風切り音と共に、目の前数センチのところを触腕が通過する。背筋がゾクリとし、腹の底に重いものが落ちるような感覚を覚えながら握りしめた剣を振るう。腕に鈍い感触を感じながら、コウは全身の力で剣を振り切った。勢い余ってよろめきつつも振り返ると、そこには事切れたイカの死体が転がっていた。ほっとしつつ周囲を見渡すと、そこには最後の敵にとどめを刺したオリーブの姿があった。オリーブはこちらの視線に気づくと周囲を見渡してから警戒をタイムに頼み、イカの死体を漁り始めた。コウは最近知ったのだが、冒険者の収入は殆どがモンスターの死体から出る素材を売ったモノなんだとか。財宝なども収入になったりはするが、発見できるのは極稀なことらしい。大迷宮と呼ばれるこの迷宮は五階層あたりまでは探索され尽くしており、そこから先は一部の屈強な冒険者やギルドしか立ち入っていないとか。つまり、一から四までの階層でお宝に有り付く可能性はほぼ無いのだ。なんとも夢の無い話である。と、コウがつらつらと無駄なことを思考している間に剥ぎ取りは終わったようだ。オリーブを先頭に再び探索を始めるグロリオーサの面々。

「さあ、あと少しで下層へ降る階段がある広間に着きます！ 気を抜かずに行きましょう！」

オリーブの号令の下、周囲を警戒しつつ進むと大きな広間にでた。木々に囲まれた空間にポツリと現れた石畳の広間は過去にどのような

な経緯で朽ちていったのだろうか。考古学者であるカトレアによると、大迷宮は高度な魔法文明の遺産である可能性が高いらしい。カトレアの使う古代語魔法も、元は迷宮から見つかった古文書にあった上位古代語魔法ハイ・エンシェントを扱いやすくダウングレードしたものなんだとか。歴史や魔法について語るカトレアは非常に楽しそうで眼福だったのをコウは覚えている。傾向は違えど平均以上の美少女に囲まれて一週間ほど。考えごとをしつつ迷宮を歩けるくらいにはコウはこの世界に馴染んできていた。

「あった、あったですよー！！」

カトレアの嬉しそうな声に振り向くと、そこには幅広い階段と手を振るカトレアの姿があった。全員が階段近くに集まり、タイムが地図に階段を書き込む。彼女はこういった細かいことを進んでやっていることが多い。ギルド単位での資金管理をしているのも彼女だ。タイムが地図を書き終わると、今日の探索を終えることになった。なんでも、二階層からは少々準備がいるらしい。名残惜しそうにしつつも帰還するグロリオーサの面々であった。

「・・・はい、一階層の探索終了を確認しました。これでグロリオサのギルドランクはE、所属されている冒険者の方の個人ランクもEになりました。このランクからは国営冒険者ギルドより斡旋されるクエストを受けることができます。クエストは本館一階の掲示板に貼り付けてありますので、そこから期日までにできるクエストを剥がしてカウンターで受領してください。また、クエスト達成の際もカウンターにて報告を行ってください。クエスト達成の確認と引き換えに、こちらで預かっている報酬をお渡しします。」

国営冒険者ギルドは今日も賑わっている。探索が午前中で終わったので、今はギルドランクの更新ついでに昼食を食べようと、コウ、オリーブ、タイムの三人で外出していた。カトレアは迷宮について論文を書くとかで宿で留守番をしているし、マリーは釣りに行くんだとか。気候が温暖なブーゲンビレアでは魚や果物がおいしいらしく、今日の晩飯を一品増やしてやる！と男らしいセリフと共に釣竿を担いで港の方へ行ってしまった。そして、今に至る。オリーブがカウンターでランクアップの申請をしているなか、コウは気まずくてしかたなかった。一週間ほどこちらで過ごして、グロリオサの面々とは結構仲良くなったとコウは自負している。しかし、一人だけ仲良くなれない人物もいた。

「・・・なんですか？じろじろ見ないでくださいまし、汚らわしい。」

タイムだ。今も目が合っただけでこの言われよう、これでは仲良く

など到底無理である。コウが加わった当初も反対した彼女は、一週間ずっとこの調子なのだ。微妙な空気の中、満面の笑みを浮かべたオリーブが戻ってきた。オリーブが戻って来ると途端にタイムは機嫌が良くなり、ほっとしたコウであった。そのままギルドの一階で昼食を済ませたコウ達は、二階層へ進むために必要な準備をするために職人区画まで来ていた。途中の市場で買った串焼き（何の肉かわからない）を食べつつ、ゆっくりと街を歩く。これから何を買うのか気になったコウはオリーブに尋ねてみることにした。

「なあ、オリーブ。二階層に行くための準備って、どんなものなんだ？」

「ああ、準備と言っても、大したことではないんですよ。」

オリーブは串焼きを齧りつつ続ける。食べ歩く姿さえどことなく優雅に見える彼女は、頬に付いたソースに気づかずに続ける。

「二階層からは、道が暗いらしいのです。それに、一階層のような生きているモンスターに加えて、アンデットと分類される屍に寄生するモンスターが出てくると聞きました。この手のモンスターは直接的な攻撃に強く、魔法で倒すにしても今のパーティーではカトレアにばかり負担が掛かります。ですが、アンデットにも弱点はあります。」

そこで言葉を切り、オリーブは近くの冒険者用の雑貨を扱う店に入って行った。後を追うと、彼女はカンテラを持ってこちらに振り向いた。

「アンデットは、光に弱いのです。日の光が一番効くのですが、炎の明かりでも十分効果があります。アンデットが光に弱ったところを叩けば、恐れることはありません!!」

キリッとした表情で宣言したオリーブだが、頬のソースは付いたままである。彼女の頬は、ソレに気づいたタイムがそつと拭うまで味付けされたままであった。

夕方。日が暮れてオレンジに染まる街を歩きながら、コウ達は宿に向かっていた。とりあえずカンテラとたいまつ、予備の火口箱などを購入したあと、いくつか店を回って薬品なども補充していたら日が暮れていたので、少し急ぎ足で宿に向かっている。夜になると、この街は治安がいいとは言えないからだ。破落戸や冒険者の中でも悪質な方の者は、夜になると活発に動き始める。そういう輩に絡ま

れると碌なことにならないのは分かり切っているので、道行く人々も早々に我が家へ急いでいる。宿に着くと、厨房から食欲をそそる匂いが流れてきた。宿の女将であるメイが作る料理はなかなかおいしい。食堂のテーブルに着いて暫くするとグロリオサのメンバーが集まってきて談笑しつつ食事をとる。この街の料理は洋風で、地球で言うならイタリア辺りの料理に近い。が、やはりそこは異世界、と言うかゲームの世界。コウは今までに見たことの無いようなモノを何回か食べたし、それらはいずれも感じたことの無い味がした。これから時が経つと日本食が恋しくなるのだろうか、と考えつつ料理に舌鼓を打つのであった。

翌日。コウ達は歩きなれた一階層を進み、階段の広間まで来ていた。隊列を組み慎重に階段を下りる。二階層は薄暗く、石で組まれた壁や道は所々が苔むしている。奥まった場所は目を凝らしても見えないくらいに闇に包まれており、階段から射す光がこの階層で最後の日の光であるようだ。カトレアが持っているカンテラに日を灯すと、暗い道を進んで行く。次第に階段は離れて行き、ついにカンテラの光だけが頼りになった。道は迷路のように入り組んでいて、タイムも地図が描きづらいようだ。進行速度を弱めて慎重に進むと、奇妙な音が聞こえ始めた。思わず全員が立ち止まり、耳を澄ませる。湿った重いモノを引きずるような音と共に、ソレは現れた。

「オオオ・・・オオオ・・・」

空気が抜けるような異音を発しながら現れた影に向けて、カトレアがカンテラを掲げた。カンテラの灯に照らされ動きを止めた影の姿に、全員が硬直した。腐敗し、異臭を放つ体に剥き出しになった骨が見える。眼窩は空洞で口は大きく開きっぱなしになっている。いわゆるゾンビというヤツだ。コウが顔を引き攣らせつつ他のメンバーを見ると、全員壮絶に引き攣った顔でゾンビを見つめていた。コウが口を開く。

「オリーブ、戦略的撤退だああああ！！」

「許可します！！総員撤退iiiiiiii！！！！！！」

叫ぶように撤退命令を出しつつ華麗にＵターン。グロリオーサのメンバーは全力疾走で階段まで逃げるのであった。

撤退から十数分後。探索を再開したグロリオーサの面々は、異様に^{逃亡}周囲を警戒しつつ進んでいた。少しでも物音がすれば全員が音の方向へ武器の切っ先を向ける程の慎重さである。暫く進んで小部屋の

様な場所に出ると、再び湿った異音が聞こえてきた。瞬時に戦闘準備を済ませて音の出所に向きあう。が。

「あの、オリーブ、マリィ、なんで俺の後ろにいるの？君達もうちょつと前が定位置じゃなかったっけ？」

コウが冷や汗を掻きつつ問うが、問われた両者は引き攣った笑顔で、

「コウ殿、気のせいですよ、恐らく。何時もより暗いところだからそう見えるのです。多分。」

「いやー、気のせいだと思うよ？それに、あたしの武器って槍じゃん？だから間合いの関係で一步下がらなきゃだし？」

などと言っている。そうこうしている内にゾンビは近づいてきており、コウは泣きそうになりながら剣を抜いた。へっぴり腰でカンテラを突き出すカトレアは頼りにならないだろう。タイムの方を見ると弓を構えてはいるが、明かりの弱さ故か狙いをつけにくそうだ。コウは前方に向き直ると大きく溜め息を吐いた。軽く息を吸って剣を腰溜めに構え、ゾンビが近づき光に眩むのを待つ。狙いは一瞬、怯んだときを全力で斬り飛ばす。一步、二歩、三歩、今！！

「うあああああああっ！！！！」

ほとんど悲鳴のような雄叫びと共に、コウは全力で剣を振るった。床に靴底を叩きつけるようにブレーキを掛け、独楽の様に回転を加えた一撃は、ゾンビを真つ二つに斬り飛ばした。二体目のゾンビが緩慢な動きで襲ってくるのを大きく避けると、そこに矢が飛んできた。合計二本の矢は空を裂いて飛び、一本はゾンビの腹に、もう一本は外れて闇に消えた。矢が刺さった衝撃でゾンビがくの字に折れ曲がる。そこに大音声を上げながら飛び込んだのはオリーブだ。

「ふえあああああ！！！！」

微妙に情けない叫び声と共に突進し、大盾を叩きつける。そこに後を追ったマリーが飛び込み、頭部に叩きつけるように槍を振るった。泥を叩いた様な不快な音と共に頭部が潰れ、ゾンビは動きを止めた。即座に全員が死体から離れ恐々と観察、動きが無いのを確認してほっと息を吐いた。たかだか一回の戦闘で大きく体力を使った様な気がして、コウ達は虚ろな目をしつつ闇の深い二階層の道を睨むのであった。

迷宮之伍 汝、恐るるべからず。（後書き）

おはにちばんわ、月海苔です。迷宮探索もどんどん進みます。二階層は地下墓地なイメージで書いとります。実際ゾンビとか出てきたらボクは失神してガブリといかれる自身があります。ではまた次回。

迷宮之祿 劍閃、烈火の如く。

薄暗い空間、湿った空気が辺り満ちている中をグロリオーサは進む。全員が一樣に疲労した様子を滲ませているのは、先ほどから数回あった戦闘の所為だろう。踏破され尽くして情報が暴き尽くされた階層では犠牲者が少なく、死体もほぼ無い。よってゾンビの数も少ないと踏んでいた面々だが、その予想は正しく、そして間違っていた。確かにゾンビは少ないのだ。ゾンビは。一方で肉が完全に削げ落ちて骨だけになったスケルトンや、死肉を喰らうオオネズミなどは多く、それらとの慣れない空間での戦闘で一行の精神はどんどんと削られていた。特に、矢面に立って攻撃を受ける前衛三人が疲弊しており、現在は戦闘を避けつつ出口である階段に向かっているところだ。

「はあっ……。このまま、何も無きやいいけど。」

思わずそう呟いたのはコウだ。彼はゾンビの様子に怯む前衛の為に率先して敵に突っ込んでいった結果、かなり疲弊していた。その所為で思わず、といったふうに漏れた溜め息だったのだが、それに噛みつく者が一人。

「あら？溜め息なんて吐けるくらいに緊張感が無いのですね。あなた一人ならともかく、わたくし達まであなたの油断に巻き込まれた

らどう責任を取って下さいますの？」

嫌味ったらしい口調でそう言ったのはタイムだ。用いる武器が暗がりでは不利になる所為か、先ほどから矢を外す度にイライラしている。コウは彼女の苛立ちが自身の不甲斐無さからくるものだど理解していたし、軽い共感の様なものを覚えていた。自分もこの世界に来てすぐの時は全然パーティーの役に立てなくて密かに落ち込んだのを覚えている。だから彼はタイムを穏やかに宥めるために自分の苛立ちを我慢して笑顔で返事をした。

「ごめん、確かに油断してたよな。これから気をつけるよ。」

「・・・素直すぎてキモいですわ。」

コウは自分の血管が切れる様な音を幻聴した。引き気味で嫌悪感を全面に押し出した様子のタイムに言い返そうと口を開いたところで。

「え？」 「この音、何ですか？」

なにかのスイッチを入れる様な音を聞いた。音の出所を視線で探ってみれば。

「あ。」 「え？」

こちらばかりを注視して文句を言っていたタイムの足元に、床と同じ色で分かり辛くなっている膨らみの様なモノがあった。タイムの顔が数瞬で真っ青になり、それに一拍遅れるようにして足元の床が彼女を奈落の底へと誘った。

「ええええええええええ！？」

偶然接近していた、コウも共にして。

落ちた先は、落ちる前と変わらない闇だった。いや、カトレアの持つ照明が無いからこちらの方が圧倒的に暗いが。コウは肩に掛けた背囊を掴み松明を取り出そうとした。が、それより先に呟くような声と共に薄明りが周囲の闇を僅かなりとも吹き払った。光源を探るとそこにはタイムが座っており、その指先には明かりが灯っていた。

「お、タイ「馴れ馴れしく呼ばないでくださいまし。」・・・君もカトレアみたく、魔法が使えたんだな。」

「これはただの魔術ですわ。魔術には戦闘に耐え得るような威力の術はありませんし、使用はほぼ日常的な要素で占められています。まあ、田舎者の貴方にはショボイ明かりの術でさえ物珍しいのでしようけど。」

そう言ってタイムは立ち上がった。立ち上がる瞬間さえ顔を顰めつつコウをバカにする彼女に対して、コウは怒りより呆れを覚えた。それに、こちらででっ上げたコウのカバーストーリーでは実際彼は田舎者なのだから仕方ない。溜め息が癖になりそうだも思いつつも彼は松明に火を着けるのだった。それから暫くの間探索して見たのだが、驚くほど敵に遭遇しなかった。不気味だと思いつつも好都合であったから、コウとタイムの即席パーティーは微妙に距離を開けつつ歩き回った。無言で歩く気まずい雰囲気の中、唐突にタイムが口を開いた。

「・・・めんなさい。」

「え?」

タイムの言葉をあまりよく聞き取れなかったコウが聞き返すと、タイムは急に俯いていた顔を上げ、真っ赤になって喚き散らした。

「ごめんなさい、と言いました!! わたくしの不注意で罫に掛かったことをお詫びすると、そういう意図で話しました、よろしくって!」

「え、ああ・・・なんか、ごめん。」

「ど、どうして貴方が謝るんですの、理解できませんわ、まったく・・・。」

その場に微妙な空気が漂う。コウは彼女が素直に謝ったことに驚き、彼女はコウがいつになく怒らないことに調子が狂うのを感じた。ここ最近やたらと小競り合いを繰り返していた二人はそれぞれ相手が厄介な舌鋒を振るうことを知っていたし、それは迷宮でも変わらなさと知っていた。しかし、暗闇に二人きりで取り残されてからはお互いが相手を気遣う仕草をして、それに両者が驚くということが多くなった。喧嘩相手の見せる以外な一面にお互い調子が狂いっぱなしなのだ。結局再び無言になり、探索を続ける二人。そんな中、次に口を開いたのはコウだった。

「そ、そうだ、さっきのだけど、ホントに悪いと思ってるなら、一個質問に答えてくれないかな。さっきの失敗はそれでチャラってことで。どうかな?」

「・・・まあ、構いませんわ。この状況に貴方がいるのはわたくし

の所為でもありますし。・・・破廉恥な質問したら殺しますわよ？」

だれがそんな質問するか！と半眼になってタイムを見つつ、疑問に思っていたことを口にする。それは、

「どうして君は男が嫌いなの？」

この一言に尽きる。彼女はただオリーブに近づく男を嫌っているように見えて、その実大して関係のない一般の男性すら顔を歪めて避ける。コウはそれが一体それはどんな理由から来ているのかを聞いておきたかったのだ。今後の為にも。すると彼女は気が進まなさそうに喋りはじめた。

「別段、深い理由ではありません。ただ、わたくしの養い親であった男に殴られて育ったという、それだけの理由ですわ。」

その言葉に、コウはかなり驚いた。彼女はかなり込み入った半生にも、それを少しの借りを返すためだけに話してくれた彼女にも。再び何とも言えない空気が二人の間に立ち込め、無言で歩を進める。すると、硬いものを床にぶつける様な音が近くなってきたことに気づいた。二人は顔を合わせると、音のした方向に走っていく。前方は小部屋の様に膨らんだところであり、彼等は迷いなくそこに飛び込んだ。そこには、

「カタカタカタ・・・。」

スケルトンがいた。しかも、錆びた汚い剣を持って、頭をボロボロになった兜で守っている。そいつの名はスケルトンナイト、剣の扱いを死体の記憶から学んだ厄介なモンスターである。ちなみに、ア宁德ットは高位のア宁德ットになる程人間に近くなり、中級を超えると人間を軽く超越し始めるらしい。松明を地に置くと共にカトレアの説明を思い出し、即座にコウは剣を抜くと斬りかかってきたスケルトンナイトを止めるために剣を合わせた。しかし、金属がかち合う鋭い音と共に、コウは後ろに押し込まれそうになった。骨だけの体のどこにコウを押し切るほどの膂力があるのかは知らないが、ひとつ、コウにも理解できたことがあった。このままだと、やられる。タイムにアイコンタクトを送り、彼女がそれに頷くと同時に渾身の力で腕を跳ね上げた。カタカタと揺れる骸骨を後目に二人は暗闇を走り始めたのだが、どうにもタイムの様子がおかしい。段々と失速していく彼女を不審に思っていると、彼女は不意に走るのを止めた。

「おい、どうしたんだよ！？アイツ、もうすぐそこにまで来てるんだぞ！！！」

「・・・着地の時に足を挫いた所為か、もう走れませんの。わたくしはいいから「ちょっとごめん」！！！」

タイムの言葉を聞いた瞬間に彼はタイムを抱え上げて走りだした。汗だくになって走る彼にタイムが噛みつく。

「いい加減にしなさい！！冒険者になったばかりの貴方が、足手まといを抱えたままアレを撒けると思いますの！？」

「だ、いじょうぶ、だって、」

「なにが大丈夫ですの、貴方もう息が切れてるじゃない！！わたくしが嫌いなんでしょう、放っておけばいいじゃない！！！！！！」

喚くタイムの頭を掻き抱くように胸に寄せて、コウはひたすら走る。正直に言うと、この女は嫌なヤツだと思っていたし、実際そう感じる場面も多かった。それでも。

「いく、ら、きら、いでも。死なせる理由には、ならねえだろうがよおおおおお！！！！！！」

ほとんど絶叫に近い声を上げて自分を叱咤しつつ、コウはこの理不尽な状況に怒りを感じた。なぜこんなところで自分が、彼女が死ぬような目に合わねばならないのか。彼女の半生の一部を聞き、彼女が喧嘩相手のために、嫌いな男のために自分を犠牲にするような真似をするのを見て、コウは彼女のことを嫌いであらなかつたし、守りたいとも思った。酸欠で回らない頭はむやみやたらと足を動かさず、気づけば袋小路に追い込まれていた。茫然とこちらを見やるタイムを背に庇い、コウは剣を抜いた。口には出さずとも、君を守る

と、その背中が語っていた。遠くから着実に迫る硬い音を聞きつつも、コウは精神を集中した。勝算の無い戦いに身を投じようとしている彼は、ふと閃きを感じた。ここに落ちた時の会話が不意に思い出される。確かあの時、タイムは魔術のことを日常的に使用されると言っていた。ということは、それは万人にそれを扱う下地があると解釈しても間違いではないだろう。つまり、魔力。もしくはそれに近い何か。誰しもに存在するのだ。なら。

それを、どんな形でもいいから体外へ捻り出してやれば、あるいは逆転の一手が見えて来るのではないか。コウは敵を目前にして目を瞑り、敵は変わらず距離を詰めてくる。タイムは彼が勝つために集中しているのを感じとり、固唾を飲んでそれを見守った。骨のぶつかる音だけが響く中、コウはゆらりと剣先を下げ、体を半歩前に出した。スケルトンナイトはそれに構わず、手中の錆びた剣でコウに躍り掛かった。瞬間、時間が止まったかのような錯覚を覚えるほど、事はゆっくりと進んだ。錆びた鉄塊が迫る。己の指が剣の柄を握りしめる。誰かの息を呑む音。意識が白熱する。そして、

歯車の回るような音を、確かに聞いた。

「っ、はあっ！！！！」

引き絞った鋭い声と共に、闇を斬り裂いて焰を纏った剣閃が弧を描く。錆びきった剣を払い飛ばし、返す刃で眠れぬ死者を一刀両断に伏した。鮮やかなその軌跡に、タイムは少しの間意識を奪われた。伏した骸が風化し、消え去るのを見届けると、コウは陽炎を纏う己を見やり、剣を収めたところで尻もちを突いた。特大の溜め息が口から漏れ出て、それを聞いたタイムがクスリと笑うのをみて、コウも微笑んだ。

それから、二人はふらふらと歩いているところを探しに来た他のメンバーに見つかり、それぞれに軽いお叱りと無事でよかったという言葉を貰いつつ（カトレアには盛大に泣かれて焦った）、迷宮の外へ帰還するのだった。

翌朝。コウは背伸びをしつつ顔を洗いに井戸に向かう。最初は冷たい井戸水に肝を冷やしたものだ、最近はずっと目が覚めるので気に入っていた。顔を洗い、すぐ脇に置いていたタオルを探す。誰かにタオルを差し出される。礼を言って顔を拭き、面を上げるとそこにはタイムが立っていた。おはよう、と挨拶をするが、彼女は何も喋らない。焦れたコウが口を開こうとすると、機先を制するようにタイムが口を開いた。

「き、昨日はありがとう!!後、わたくしのことは名前で呼ぶことを許可します!!」

それだけ言うと彼女は真っ赤になって走り去って行った。残されたコウは空を見上げ、それから朝食を摂ろうと食堂に向かった。今日は、いい日になりそうだ。理由もなく、そう思った。

迷宮之礫 剣閃、烈火の如く。(後書き)

おはにちばんわ。月海苔です。今回を一言で言うなら、『ベタ』の一言に尽きますね。後、展開早すぎ、でしょうか。でも、こう、王道的な展開って、来ると分かっても燃えますよね。そんな加減を表現できたらなあと思いつつ、また次にお会いしましょう。では。※ちなみに、タイムはデレたように見えてデレてません。仲が多少よくなったくらいですあしからず。

迷宮之漆 金は天下の回り物。

「・・・はい、二階層の探索終了を確認致しました。おめでとうございます、これでグロリオーサのギルドランクはD、所属されている方のランクもDとなりました。これからこの調子で頑張ってくださいね？」

そんな言葉と一緒に、ランクを更新したカードが手渡される。オリブはソレを受け取ると、溢れそうになる笑いをかみ殺そうとし、失敗してグフツとか、グハツという様な奇怪な笑い声を上げた。周囲が彼女を遠巻きに見ているのにも留めずにニヤつきながら一つのテーブルに近づいて行く彼女の目線の先には、期待を込めてこちらを見つめる仲間達がいた。そんな彼女達に対して、オリブは零れんばかりの満面の笑みで口を開いた。

「本日、我らがギルド『グロリオーサ』は、ランクアップを果たし！ランクDになりましたッ！！」

その言葉に、全員が程度の差はあれど喜びの感情を示し、その様子を見てオリブも自分の主宰するギルドの成長を改めて喜んだ。紆余曲折を経てギルドを結成し、メンバーを5人集めてから今まででおよそ一ヶ月と少し。新人のみのギルドとしては以外な程早いペースで、グロリオーサは迷宮を踏破していた。コウとタイムが落とし穴の罠に嵌り、無事に帰還してからというものの、二階層の探索は

かなり早くなった。アンデットや暗闇での戦闘に慣れたというのも大きかったが、やはり一番大きかったのはコウの成長だろうか。ギルドの黒一点である彼はいつの間にか魔力を剣に纏う技術を身に着けてから、アタッカーとしての能力が格段に増していた。今ではこのギルドに欠かせない人物である。まあ、オリーブにとっては全員が欠かせない人物なのだが。ともかく、お祝いの意味を込めて少し高い料理を食べつつ今後の計画を立てることにして、彼女はウェイターを呼んだ。

食後。彼女達は顔を突き合わせて悩んでいた。悩み事の原因は勿論、現在全力で進めている迷宮の攻略についてだ。現在、十三階層ある大迷宮は四階層までを探索され尽くしており、それ以降の階層はトップクラスの実力を持つギルドやギルドに所属しない一匹狼な実力者達が探索を進めているところである。では、なぜその階層の数が知られているのか。それは単純に、最下層まで潜った者がいたからである。

迷宮王ヴェロニカ・ヴィクトリアス。彼は王家に二男として生まれ、しかし兄の母親が庶民の生まれだったために第一継承権を持っていた。彼は兄に妬まれて育ち、父王の没後には継承者争いで妾腹の子である兄に追われ、僅かな手勢と共に古くから存在していた大迷宮へ逃げ延びた。そこで彼は追っ手から逃れるために迷宮の深部へ潜り、最下層にてとある“力”を得たとされている。その力でもって彼は兄王に挑み、彼の王の暴虐に耐えかねた勇士達と共に終には王軍を打ち破り、兄王を討ち果たして王の座に就いたのだとか。この話については色々な仮説が入り乱れており実像ははっきりとしない

が、どの歴史書にも変わらないことがある。それは、迷宮の階層は十三階層あること、迷宮の深部には何かがあるということだ。その何かを求め、今日まで冒険者達は探索を続けている。また、迷宮が探索され始めた頃はお宝や強力な武器、危険な魔法を記した魔導書などが多数発見されていたので、そちらを目当てにする者も少なくなかった。というか、曖昧な“何か”よりもソチラを求める者の方が多かったらしいが。

それはさておき、長年に渡る探索によって、迷宮には現在に至るまでに探索され尽くした階層が多い。これからグロリオーサが挑む三階層もその一つだ。オリーブが静かに話し始める。

「次に私達が挑む三階層は、情報によれば地底湖が近くにあるためか通路は浸水しているところが多く、洞窟のような造りの為か非常に滑りやすいとのこと。また、夏場においても冷え込むらしく、環境に対しての対策が必要な様です。その準備の為に、資金集めを行いたいと思います。ではタイム、説明をお願いします。」

その言葉を聞いて、はいっ、お嬢様！と異様に張り切った声で返したタイムは懷から紙を取り出し、読み上げ始めた。それは、探索に使った備品の値段であったり、最近返し終わったコウの装備代であったり、今食べた料理の値段であったり。ひとしきり読み終えたタイムは、手元のグラスから水を飲むと再び口を開いてある額を呟いた。

「・・・今読み上げたのは、今日に至るまでにギルドで使った出費

の総額ですわ。そして、この金額は見事に収入と相殺されています。
この意味が、分かって？」

「つまり、差し引き無し^{イーブン}ってことだろ？よかったじゃないか、借金
なくてさ！」

冷やかなタイムの言葉に対し、笑顔を浮かべて返したのはマリーだ。パエリアのような海の幸がふんだんに入ったご飯を食べつつ、スプーンを左右に振って得意げな顔で言っただけのマリーに対し、タイムの目尻が瞬時に吊り上った。

「ええそうですわイーブンですわよイーブン！！低級ランクかつ弱小ギルドの冒険者が！今に至るまで貯金一つ無し！！いくら資金があってもこの調子じゃすぐにでも財布が干からびてしまいますわッ
！！！！！！」

かなりの迫力で詰め寄りつつもマリーに怒鳴るタイム。それを見つ
つ、コウはオリーブにこれからどうするのかを尋ねた。

「話は分かったけど、これからどうするんだ？日雇いのアルバ……
いや、仕事でも探すのか？」

そんな発言に反応したのはカトレアだ。苦笑しつつも立ち上がって、
冒険者ギルドの壁を指差した。

「お兄さん、その発言は流石にどうかと思うです……。私達は冒険者なんですから、冒険者らしいやり方でお金を稼ぐんです！！ほら！」

コウはカトレアの指先を視線で辿ってみた。するとそこには掲示板と紙の山。

「なるほど、クエストを受けて稼ぐのか！」

「ええ、今回のランクアップに伴って、受けることのできるクエストも増えたはずです。そこで、これから一週間の間はクエストでお金を貯めて、三階層へ行く準備をしたいと思います。では、私はこれからクエストを選びますから、コウ殿もなにか選んできてください。……では、夜に宿で落ち合いましょう。」

そう言ってオリーブは去って行った。腹が減ってはなんとやら、と、コウはとりあえず残っている料理を腹に収めようとし、途中で袖を引かれたので振り返る。すると、そこには涙目のカトレアが。涙目の理由を探してそこから視線をずらすと掴み合いの喧嘩をしているタイムとマリーが見えた。周囲には野次馬が集まり二人を囃したている。そんな光景に思わず漏れた溜め息が癖になっていることに落ち込みつつ、コウは喧嘩を止めに向かうのだった。

昼時を少し過ぎて、今は大体三時くらいだろうか。コウはビンを喰らった両頬を擦った。喧嘩を止める際に一発づつ綺麗についた紅葉型の痕を抑えつつ職人区画へ向かうコウの隣には、カトレアが歩いている。コウはカトレアに愚痴を言いつつ歩いていた。

「なんでいつも、俺に被害がくるのかな……。あの二人も、謝ってくれたからいいけどさ、謝るなら最初から喧嘩しなきゃいいのに。なあ、そう思わないか？」

そんなコウに対してカトレアは苦笑を漏らしている。大の男が現代基準なら中学生であろう少女に愚痴る様はかなり情けない光景であった。おとなしく愚痴を聞いてくれるカトレアに感謝しつつも、コウは自分が情けないヤツであることに気づいて軽く落ち込んだ。終始そんな様子で歩きつつ、目的地である武具を扱う店に着いた。両開きの扉を押し開けると、中には厳めしい鎧兜や、剣や槍の刺さった樽があったりと物々しい雰囲気満ちている。並んでいる武具の間を抜けてカウンターに向かうと、これまた厳めしいおっさんがこちらを見ている。即座にコウの後ろへ引っ込んだカトレアをよそに、コウは冷や汗を掻きつつ一枚の紙を取り出した。そして、そこに書いてある文章を読み上げる。

「ええっと、『魔法の掛かった品を鑑定してほしい』という依頼を、ギルド宛てに出しましたよね？俺たちは、依頼を受けて来た冒険者

で、コウと・・・「カ、カトレア・・・です・・・。」と、いいます！
！あ、あの、あなたは依頼を出された、スターチスさんで合ってます・・・よね？」

「ああ、ワシがスターチスで合ってるが・・・ホントに大丈夫なのか、あんたたちに任せて。」

のっけからグダグダである。カトレアの誘いで一緒にクエストを受けたコウだったが、彼は彼で初クエストに緊張しているし、カトレアは厳ついおっさんであるスターチスにビビッてコウの影から出てこない。そんな彼等に不安を感じつつも、スターチスは説明を始めた。

「まあ、誰でもいいと頼んだのはこっちだから仕方ないが・・・。さて、それじゃあ依頼の内容を詳しく説明するが。まあ、説明するまでもない内容だ、書いてある通り魔法の品と思われるモノが倉庫に保管してあってな、それを本当に魔法の品か、本物ならどんな効果なのかを調べてほしい。かなり多いから三日ほど掛かると思うが、大丈夫か？」

「はい、その辺りは大丈夫です。じゃあ、その倉庫に案内してもらえませんか？」

「ああ、じゃあ付いてきてくれ。後、倉庫にも武具は多いから気を付けて歩けよ。」

そう言って歩きだしたスターチスの後を追う二人。店の裏手にある廊下を抜けて暫く歩くと、頑丈そうな扉が見えた。スターチスが持っていた鍵で扉を開けると、中には広い空間と棚があり、所狭しと武具が並べてあった。そんな中でコウは奇妙な、感覚に訴えてくるような気配を放つ棚を発見した。コウとカトレアが棚に近づくと、スターチスが微妙な表情で話を始めた。

「それが今回の依頼の品だ、冒険者が迷宮から持ち帰ってきた品だな。モノがよかったんで売りに出したんだが一週間と経たずに買ったヤツが返品しに来やがるんだよ。そのときに理由を聞いたんだが全員がこれは呪われてると口を揃えて喚きやがるんだ。しかも、その中でも剣は特別でな。一際返品されるのが早いんだよ。」

処分しようにも、呪われちゃあ叶わないんでな。頼んだぜ？と、そう言ってスターチスは店番に戻って行った。コウは再び棚に視線を戻す。そこには、銀色に輝く刀身を晒した剣が横たえてある。呪いの剣であると聞いたが、それは本当なのだろうか。とりあえず、今の話に怯えて半泣きのカトレアを宥めてから確認しようと、コウは小さな溜め息をつくのだった。

迷宮之漆 金は天下の回り物。(後書き)

おはにちばんわ。月海苔です。一万PVを確認しました。口からカフェオレと皆様への感謝の念が溢れました。拙作をご覧頂き真にありがとうございます。感謝の番外編を書かせて頂くつもりですが、最近時間的余裕が無いので書きあがるのは結構後かもしれません。それに、番外より本編を優先させたいと思いますから。では次は次回or番外でお会いしましょう。

迷宮之棚 信あれば徳あり。

所狭しと言わんばかりにぎっしりと武具が並んでいる棚に、天井に近い窓から注がれる太陽の光が差し込み反射する。古臭い鎧から銀光を放つ名剣まで様々な武器があるなかで、魔法の品を探し、検品するのはなかなか大変なことだった。カトレアは手に持つ槍を調べつつ、額の汗を拭った。ギルドでクエストを受けてから今日で二日目。初日は曰く付きの品に怯えていた彼女だが、倉庫の中に年代物の武具を発見してからは水を得た魚の様に鑑定を始めた。その勢いと口から奔流のごとく溢れ出す蘊蓄にコウは思わず冷や汗が出たほどだ。それはともかく鑑定の効率が上がったのは確かであって、コウが品を運びカトレアが鑑定するという分担で仕事を進め、期日である三日目を待たずにクエストを達成できそうなほどに鑑定は進んでいた。そんな中、カトレアが槍を鑑定していると、倉庫の奥からコウが戻ってきた。

「カトレア、君の持ってるソレが終わったら、鑑定は一通り終わりたいだ。・・・あの棚を除いて、だけど。」

コウはそう言って、カトレアの近くにある棚を指差す。その棚にあるのは、最初に店主であるスターチスから聞かされた、呪いの武器の数々だ。鑑定が終わった槍を置くと、カトレアは強い意志の籠った眼でコウを見据え、口を開いた。

「お兄さん、帰りませんか？」

つまり、どうしても呪いの品を見るのは嫌ということなんだろう。実際、カトレアの足は震えているし、眼も意思が籠ってるんじゃないかと泣くのを我慢しているだけだった。なんでそんなに怯えるのか。コウにはわからなかったが、それは多分魔法が実在する世界と科学的思考の発達した世界における呪いの説得力の差なんだろう。と納得した。なんせ、最近は忘れていたがここはゲームに非常に酷似した世界なのだ。呪いくらいあって当然かと、そこまで考えてからコウは未鑑定品の棚に近づいた。そこには鏢の近くに赤い石が埋め込まれた数本の剣と、他の剣よりも大きく美しい宝石が埋め込まれた目立つ装飾の剣が一本置いてある。おそらくこれが店主の話にあった特別な剣とやらだろう。コウは無造作にその装飾剣を掴み、カトレアに振り向いて微笑んだ。

「ほら、どうってコト無いじゃないか！カトレアは怖がり過ぎだよ、呪いなんてあるわけないじゃないか！！」

しかし、カトレアは目を見張ってコウの後ろを見ている。実害はなかったのにどうしたのだろうか。とコウが疑問に思っていると、突然カトレアが叫んだ。

「お兄さん、後ろですうー！！！！」

真っ青な顔色で叫んだカトレアに驚き振り向くと、そこには宙に浮

いている数本の剣があった。しかも、切っ先が全てコウに向いている。コウは後退りをしつつカトレアの近くまで来ると、彼女と顔を合わせてアイコンタクトを取る。そして、

「「うわあああああ!!!」」

逃げた。倉庫に通じる通路を駆け、店の裏口を突っ切り、駆け込んできた二人に驚いたスターチスを見捨て店から転がり出た。荒い息をしつつ職人区画の広い通りに出てからようやく止まった二人は、息を整えて顔を上げ、瞬時に顔色が悪くなった。

「ついできてる・・・」

そう、剣の群れはこちらを見失うことなくついてきていたのだ。逃げるのは無駄と悟った二人が戦闘態勢に入ると、急にコウが握っていた装飾剣が震えだした。驚いたコウが思わず剣を投げ捨てると、剣は地面に着くこと無く宙に浮いて剣の群れと合流した。増えた剣群は総勢七本。コウは自前の剣を鞘から引き抜くと、それらを見据えて身構える。コウの後ろにいるカトレアも、杖を取り出すと詠唱を開始した。その声に反応したかの様に剣群から二本の剣が飛んでくる。風を切って迫る魔弾が狙うのは、当然カトレアだ。しかし、剣弾は振り上げる様なコウの剣撃に弾かれて吹き飛んだ。が、剣で剣を斬ってもダメージを与えられないのは当然のことで、まったく動きを鈍らせることなく再び剣が迫ってきた。そこに、カトレアの放った炎の魔法が蛇の様に襲いかかる。再度吹き飛ばされた剣は、やはり何事も無かったかのように剣群と共に宙に佇んでいる。コウ

は米神に流れる汗を袖で乱暴に拭うと、剣を正眼に構えた。後ろには庇うべき相手がいるが、敵は強く、まったく歯が立たない。恐怖が喉元に迫り、剣を握りしめる手が硬く引き絞られて白くなる。どうすれば勝てるのか。魔力を剣に流しても恐らくダメージを与えるのは無理だろう。いくら剣撃の威力が上がっても、コウの腕では斬鉄などできる筈もない。負けるのだ。^{死ぬのだ}。そんなネガティブな思考を巡らせるコウを救ったのは、沈痛な面持ちのカトレアの声だった。

「・・・お兄さん、お願いがあります。少しだけ、時間を稼いでくれないですか？あの剣を倒すには詠唱のために時間があるんです。・・・アレら七本を相手するのは難しいかもしれ「わかった、やるよ。」「！！・・・いいんですか、もしかしたらし、死んじやうかもしれないですよ！？」

驚くカトレアに対して、コウは冷や汗を掻きつつも笑顔で告げた。

「カトレアのこと、信じてるから。」

そう言い放つとコウは剣を構え直し、敵を見据えた。自分では奴らに敵わず、カトレアになにか策があると言うならそれに乗る以外に道は無い。それに、一ヶ月程度の付き合いだが、共に戦ってきた仲間なのだから信じてることができる。それを口に出したのはカトレアを安心させたかったのと、もし死ぬのならせめてカッコイイこといって死にたかったというのがある。勿論、死ぬつもりなど毛ほども無いが。剣群はこちらを窺うように中空を揺れている。剣を握り締め、熱いモノが流れるような感覚と共に魔力を剣に流し込む。そし

て、

「其は熱纏い、空を奔る！！」

戦いが始まった。突っ込んでくる二本の剣を叩き落とし、さらに飛んでくる剣を下から跳ね上げる。地に叩きつけた剣が鋭く飛び上がってくるのを横に回転して避けつつ、ブレーキと共に横薙ぎの剣を二本に叩きつけて吹っ飛ばした。

「木々を裂いて地に降り、雲と成って天へ上がる！」

詠唱による魔力の高まりを感知したのか、装飾剣以外の剣が全てこちらに向かって来ている。コウは浅く息を吐いてから深く吸い、齒を食いしばって剣を振るう。その一振りで三本を吹き飛ばしたが、残りの三本から斬撃を受け膝をついてしまう。咄嗟に身を捻ったが躲しきれず、腕、腿、腹にそれぞれ傷を受けたのだ。斬られた部分が白熱していく錯覚を憶えながらも、なお剣を振るう。一合、二合、三合。

「慈雨と共に来たりて、罪人を裁く神の鉄槌！！」

四合、五合、剣を振るう度に思考が鈍化し、反比例して剣は冴えてゆく。頬を掠める剣閃を首を傾げて躲し、袈裟斬りを逆袈裟で跳ね飛ばす。その際に浅く腕を斬られる。傷は熱を持ち、熱は剣へと送

り込まれて燃え上がる。そして、

「お兄さん、下がって！」

聞こえてきた声に反応し、大きくバックステップを踏むと、それを追撃にきた剣が雷撃の網に囚われるのを、コウは見た。

「汝、紫光の雷撃！ヴォルテージ！！」

トリガーワード
呪文詠唱が放たれると同時に広がった雷撃の網は、六本の剣を絡め取ると網の中心である紫電の光球へとそれらを誘った。剣群が完全に光球へ飲み込まれると激しく放電が始まり、それが収まると残ったのは煤けた剣が折り重なってできたオブジェだけだった。激しい雷撃が消えたのを感じた装飾剣は、それを成した少女に向けて疾風の如く飛来するが途中に割り込んだコウによって弾かれる。そのコウに向かって、カトレアは大きな声で自分の考察を伝えた。

「お兄さん、恐らくそいつはリビングソードという魔物です！！リビングソードは魔法生物で、どこかしらに魔力の源である核があるはずです！それを壊して！！」

それを聞いたコウは打ち合いを続けつつ敵を観察する。魔力の核は探すまでもなく見つかった、恐らく核は鍔元にある宝石だろう。首を狙う斬撃をしゃがんで躲し、そのまま縦に回転してきたところを

前に跳ぶ様にして避けた。追いつがってくるのを確認し、直線で突撃してきた剣を地に叩きつけて刃の腹を踏む。大きく息を吸い込み、振りかぶった剣を宝石めがけて振り下ろした。思いのほか軽い音を立てて核は碎け、飛び上がろうと抵抗していた剣はあっさりと沈黙した。足をどけて、敵が動かないことを確認したコウは、剣を握りしめたまま地面に倒れ込み、

「お兄さん!!」

駆けつけてきたカトレアの声聞きつつ、気を失った。

宿の自室からは快晴の空が見える。窓から吹く風は程よく涼しく、そつと髪を撫でて流れてゆく。ああ、今日は良い日だなあと考えたところで、

「お兄さん? ほら、はやく口を開けてください。ほら、あーん?」

一気に現実に戻された。目の前には匙を差し出すカトレアがい

て、その後ろにニヤニヤと厭らしい笑みを浮かべているマリーがいる。どうしてこうなった。コウの頭はそんな言葉でいっぱいだった。あの後、気を失ったコウは救護所に運び込まれ、治療を受けた。その後、依頼主のスターチスに事の次第を話して感謝の言葉とかなり色を付けた報酬を貰ってからギルドに行き、ギルドにもリビングソードのことを報告しておいた。ギルドは都市警備隊と連携を取って無機物系魔法生物が市場に出回っていないかを捜査するのだとか。それから暫く、コウは傷を癒すために静養ということになり、宿でのんびりしようと思ったのだが・・・。

「？お兄さん、具合が悪いんですか？」

「い、いや、なんでもないよハハハハ・・・！！」

わたしがお兄さんの看病をします！！と、カトレアが部屋に押し付けてきたのだ。それをマリーに見られ、先ほどからかわれっぱなしというのが現状だ。

「お兄さん、いっぱい食べなきゃ良くなりませんよ？ほら、あーん」

「そうだな、食べなきゃ健康になんないもんな？ほらコウ、はやく食べなよ？あーん、ってさ！！」

至極真面目なカトレアの後ろで嗤う褐色の悪魔にイラつきを憶えつ

つ、コウは羞恥心と空腹の狭間で悶絶するのであった。

迷宮之捌 信あれば徳あり。 (後書き)

おはにちばんわ。月海苔です。八話を書き上げるのに思いのほか時間がかかりました。しかも改めて見ると地の文も詠唱も厨二病という。呪文詠唱って書くの難しいよ!!後、タイトルはことわざです。本来の意味は信仰心があれば福徳を伴うという感じの意味ですが、今回は信頼は良い結果を呼び込む、という意味を込めてタイトルにしました。では、また次話に。

迷宮之玖 裏と表と。

大迷宮三層中階、地底湖。水底にあるハイドロライト鉱石が放つ青い輝きに照らされた空間は、地上の様に明るく、しかしてその輝きは地上の太陽のように優しくは無い。貴族のワイングラスから一線級の冒険者が纏う武具まで、広く需要があるハイドロライトだが、その希少さ故か市場にはあまり出回らず、高価である。故になまじ実力のある冒険者は、地底湖の底で輝きを放つ値千金の鉱石を求めて水底に潜ることがある。しかし、鉱石が今まで市場に出回っていないことからわかるように、こういった目論見が達成されたことは未だかつてない。それは何故か。ある学者は、湖の水に人体を毒する成分があると言い、ある冒険者は水底に怪物が潜んでいると言う。実際は、そのどれもが違うのだが。いや、前述した冒険者の発言は違うとも言いきれないが。水底に潜むのは怪物ではないのだ。そこにあるのは美しくも寒々しい輝きを放つ鉱石である。その輝きは何者にも邪魔をされずに洞窟状の迷宮の天井に射している。そう、水棲生物や塵屑の一片も無い湖を通して。

大迷宮、三層中階地底湖。古い文献ではこの湖をこう呼ぶ。『食欲なるアンモビウム』、と。そんな、得体の知れない湖の湖面に、ふと、漣が起こった。漣は連続して波紋を広げ、終には湖の中心にまで至った。波紋の中心である湖面には黒い影が直立しており、影は暫しそこに佇むと溶ける様に消えた。そして静謐を取り戻した湖に、今度は何処からともなく歌が響いた。その歌は、その歌には、一切の感情が籠っていないかった。機械的に紡がれる旋律には意味はなく、歌い手もその歌に意味を求めてはいないであろう、そんな歌だ。歌

は響く。何の意味も持たず、ただただ、機械的に。

朝日に眼を細めながら、勢い良く起き上がって欠伸を一つ。吐き出した息が宙に溶けることすら待たずに、慌ただしく身支度をして、今日からは焦る必要の無いことを思い出して安堵の溜め息を一つ。今日に至るまでの四日間、彼を襲った絶対安静と言う名の羞恥地獄ともお別れなのだ。朝から晩まで年下美少女に世話されて真っ赤になる必要も無し、それを同年代の褐色美少女にからかわれて忍耐力の訓練をする必要も無し。はたまた、冷たい目をした巻き毛の美少女にロリ○ンと蔑まれることも無し、金髪美少女に破廉恥ですと説教されることも無い。彼はいつの間にか頬を伝っていた涙を拭い、晴れやかな顔で窓から空を見上げた。

「俺は、自由だ・・・!!」

そんなことをのたまいつつ、コウ・ミスミの異世界生活は今日も始まるのであった。二階の自室を出て階段を下り、食堂へ入る。食堂はいつも通り賑わっており、この宿の女将であるメイが忙しそうに料理を運んでいるのが見えた。そんななか、こちらに手をふる集団がいるのを見つけたコウはそちらに近づく。そこにはいつもの見慣れた面々が居り、コウが空いた席に座ると食事が始まった。今日の

朝食はバターロールにシチュー、それと新鮮なサラダだ。そのどれもがおいしく、コウは朝からシチューを二杯平らげた。それから小休止の後、グロリオーサの面々は作戦会議に入る。まず、ギルドマスターたるオリーブがどこか嬉しそうに話し始めた。

「まず、皆が気になっていると思う、金策の結果を発表したいと思います。タイムによる集計の結果、我々は目的の金額をやや超える程に軍資金を集めることができました！これも皆の努力あってのこと。私は嬉しく思います。そして！！」

一際おおきな声で皆の関心を引くと、オリーブは勿体ぶるような調子で声を潜めて続けた。

「目的の金額が集まったということは！我々が三層の攻略に着手できるということです！！」

その言葉に、全員の顔が引き締まった。第三層の攻略は、グロリオーサにとって大きな意味を持っている。オリーブは満足そうにメンバー全員の顔を見渡し、自分も表情を引き締めてカトレアの名を呼んだ。はい、と短く返事をしたカトレアは立ち上がると今まで書いた迷宮の地図を広げて説明を始める。

「第三層の攻略は、今までの冒険とは勝手が違ってきます。まず、第三層までの道のりを進むのに時間がかかるため、今までの様によりで探索を終えて宿に戻る。といったサイクルでは攻略は進みまな

いのです。つまり、わたしたちは迷宮で野営をしつつ攻略を進めるという、慣れない環境でのスタートになります。さらに、保存食やテントなどの荷物が増えたり、野営の際に見張りを立てる必要があったりと慣れないこと尽くしです。ですから、今日一日を準備日として、足りない品の確保や三層の情報集めなどに充てて、入念に準備した上で明日以降の攻略に備えたいと思います。よろしいですか？」

カトレアの言葉に頷いたメンバーたちは、いくらか相談しあってからそれぞれの目的のために宿を出た。コウは当初買い出し班の荷物もちだったのだが、ずっと寝っぱなしで勘が鈍ってるんじゃないの？というマリーの言葉を受け、午前をマリーとの鍛錬に充てることとなった。宿の中庭に出てストレッチをしていると、遅れてきたマリーが何やら長さの違う棒を持って近づいてくる。コウがそちらに眼を向けるとマリーは短い方の棒をコウに向けて放ってきた。慌てて受け止めるコウに対して、マリーは大きく振りかぶった棒を叩きつけてくる。それを後ろに跳んで躲すと、コウはマリーに向けて怒鳴った。

「いきなり何するんだ！！危ないだろ！！」

「うるさいなー、実戦の勘を取り戻すのにちんたら素振りとかしても意味無いでしょー？ほら、構えた構えた！！」

謝る素振りさえ見せずに楽しそうな顔をこちらに向ける姿に、コウは怒りを散らされ溜め息をついた。軽く目を瞑って深呼吸すると手

元の棒を剣の様に握り、改めてマリーと相對する。すると、彼女の表情も引き締まって凜としたモノになり、両者の間に沈黙が訪れる。一秒、二秒、三秒、このまま続くかに思われた沈黙を破ったのはコウだ。長柄の得物相手に距離があるのは不利と見て、弾丸の様に突貫してゆく。それに対して冷静に突きを放つマリーだが、コウはその軌道を読んで僅かに身を躲すだけで鋭い突きをやり過ぎ、懷に潜り込む。そのまま勢いよく横薙ぎの一撃を放つが、慌てずに手中で棒を滑らせ、攻撃の軌跡に武器を割り込ませたマリーに弾かれる。勢いに乗って二閃、三閃と棒を振るが、流水の如く滑る棒に悉くを受け流され、焦りがコウの顔に出る。すると、ソレを見計らったようなタイミングで豪快かつ荒々しい振り下ろしがコウに打ち掛かった。守勢のマリーから反撃がくるとは思わず慌てたコウは棒を顔の前に突き出し、

「やあっ!!」

「うわっ!？」

即座に棒を引っ込めたマリーの足払いに掛かってすっ転んだ。訳も分からずに尻もちをついて目を白黒させるコウに向かって、マリーは笑顔で批評を口に出した。

「病み上がりの割にはやるじゃん!ま、あたしには敵わないケドね。コウってば、モンスターばっか相手にしてたからか、ちょっとばかり剣が素直すぎんのよね。ま、それでも最初あったときよりかだいぶ強くなってるけど。」

とのことだった。コウは立ち上がると、自分の手に視線を向ける。

剣を握って一ヶ月。この一ヶ月で、どれだけ剣を振るっただろう。数えてはいないが、相当な数の剣撃を放ち、いくつもの命を奪ってきた。タコが出来、やや硬くなった自分の手はその証だ。これからもこの手は剣を振り、命を奪い、箸を掴み、人に触れるだろう。音が出るくらいに手を握り締めると、コウはマリーの目を見て口を開く。

「もう一本、頼む。」

その言葉ににやりと笑うと、マリーは無言で棒を構えた。コウは棒を構えると、再び突貫してゆく。生きるために命を奪った。たとえばそれがモンスターであろうと、命に代わりは無い。ならば、奪った分だけ長く生きれるように頑張ろう。コウは思考を剣撃に乗せ、振るった。二人の稽古は日が暮れ、帰ってきたメンバーに叱られるまで続いた。

夜の帳が街を覆い、静かな風が頬を撫でる。街の景色を眺めていたコウは、窓を閉めるとベットに横になった。眼を閉じると浮かんでくるのは元の世界のことだ。ちょうど一ヶ月くらいと、意識し始めた途端に家族のことや大学の友達のことが浮かんできた。ホームシックだろうか、と考えたところで意識が鈍りだし、深く沈む。明日の冒険は、楽しいだろうか。そこまで思考して、意識は眠りに沈んだ。

機械的に、奇怪的に。延々と歌は続いていた。黒い影は踊る様に湖面を滑り、回る。くるり、くるり。湖の光に照らされて踊りわになったその姿は、人型の、少女の様なシルエット。無感動に、無機質に。無表情に歌うソレは、ただただ歌を紡ぐ。

「待ち人は、来たらず。来よ、救世主。其は、異邦の来訪者。^{エトランゼ}三千世界の遍くを知る、神の命を癒したまへ。」

歌を、紡ぐ。

迷宮之玖 裏と表と。(後書き)

おはにちばんわ、月海苔です。体調が悪く、執筆が遅れました。みなさん、風邪にはくれぐれもお気を付けてください。手元が狂って書きかけの文章全部パーになるなんてことが起こりかねません。マジで。本文も酷いモノですが、次回はきっちり書くよう頑張りますので、見捨てないでくれると嬉しいです。では、また次回にお会いできたら。

迷宮之拾 荊棘の道を行く。

迷宮の第一層は、相も変わらず深い緑を湛えている。初夏の日差しが暑く感じられる季節であるにも関わらず、ここには涼やかな空気が流れている。コウは深呼吸すると、涼みながらも己に気合を入れた。なにせ、今日からグロリオサは第三層の攻略に入るのだ。持ってきた荷物はおよそ一週間分ある。慣れない環境でどれだけやれるかは誰にもわからないが、全員が全員、程度の差はあれども気合の入った心持ちで今日の日に臨んでいた。鬱蒼と木々の茂る一層を進み、暗く湿った二層を過ぎ、ついに一行は三層へ続く階段に着いた。事前に打ち合わせた通り防御が一番うまいオリーブが先頭になって進み、階段を下る。長い階段を下りていくと唐突に視界が開け、薄明りが一行を照らした。そこには、神秘的にも思われる光景が広がっていた。鍾乳洞の様に白色の滑らかな石が壁を覆っており、所々には氷柱の様に柱状となって垂れ下がっている。足元は水が滲み出しているのか幾つか水溜まりができており、少し滑りやすそうだ。そんな中、一番に奇妙なのは何箇所かある光る壁だ。コウが壁に近寄ってみると、そこには淡い光を放つ苔のようなモノが生えていた。

「ふむ、それはランプゴケです。水を吸って光を放つ珍しい苔で、迷宮にしか生息しない特殊な種だそうですよ？・・・ウフフ、これだから迷宮探索はやめられないですよー！！そもそもこの種が最初に発見されたのは・・・」

唐突に話しだしたカトレアは、知識と怪しいオーラを振り撒きつつ

迷宮についての蘊蓄を語り始めた。そんなカトレアに対して一行は慣れた手つきで襟元を掴み、引きずって進むのであった。カトレアの迷宮トークをBGMに進む中、コウの口からふと疑問が零れた。

「そういえば、この迷宮って誰が、何のために造ったんだろう？」

そんな、独り言にも等しい些細な疑問に反応したのはカトレアだ。
迷宮ラタク
擬音の付きそうな程に素早く首を回してコウを視界に捉えたカトレアは、嬉々として迷宮の成り立ちについて話し始めた。

「ムフフ、いい質問ですお兄さん！誰しもが一度は考えることですが、迷宮とは誰が何の目的で造ったのか！！これについては幾つか仮説があるですよ。まず一つ目、天変地異で沈んだ古代の文明説。これはあんまり信じられてない説ですよ、何せ迷宮は完璧に意図されたとは思えない層構造ですから。天変地異で沈んだにしては整然とされ過ぎてて信憑性がないです。では、次は二つ目。人外の生命体による建造説。これは、人間によって追いやられた種族が地下にその住処を移したという説ですね。これも、信憑性がないですよ。なぜなら、迷宮を造れる程の種族が古代の人間に追いやられるとは考え難いですからね。争いを嫌う種族だったのかもしれないですが、それならそれで迷宮に入口があるのはなんでかとか色々あるですからこれも没。そして三つ目は神による建造説。今現在信じられてるのはこの説ですよ。正直この説もあんまり信憑性無いですけど、迷宮は人間の技術力では到底造ることのできないモノですから・・・それにこの説では目的もはっきりしてるですから一応、今現在では一番信じられてるです。」

そこで一旦、カトレアは言葉を切った。話し続けている内に冷静さを取り戻したらしく、その様子に他の面々は後ろでホッとしている。コウは怒涛の勢いで話された情報をなんとか飲み下し、カトレアに続きを促した。

「神様が、地上に迷宮を造った目的って？」

「人間に試練を与えるため、だそうです。試練を与え、成長を促し、迷宮を踏破した者たちを神の膝元へ招いて安寧を与えるんだとか。ま、そんなことを言ってるのは一部の宗教団体だけですけど。・・・皆、迷宮の存在に意味など求めていないのですよ。其処宝箱であるか否かに何があるのか。冒険者にとってはそれだけが大事なのです。」

そう言ったカトレアはすこし寂しそうだった。学者として思う所があるのだろうか、それとも別に何かあるのか。それにしても、とコウは今の話について思考する。それにしても、試練とは。そも、神は実在するのだろうか。いるのだとしたら、今の自分の状況は、神の采配によってここにいるのだろうか。なぜ。どうして。回る思考の中で、不意に違和感を感じた。ここは迷宮の中で、当然迷宮には様々な罠や多様なモンスターが存在する。それなのに、何故今までそういった障害に遭遇しないのか。違和感を感じていたのは全員の様で、陣形を密にすると周囲を警戒しつつ進む。が。

「おや、あれ階段じゃないか？ここまで一切戦闘が無いなんて、どうも胡散臭いねえ。」

「あら、珍しく同じ意見ですね。確かに迷宮内でこんなにスムーズに歩けるのはおかしいですね。お嬢様、お氣をつけてくださいまし。」

マリーの言葉に珍しく同調したタイムが、オリーブに警戒を促す。軽く頷いたオリーブは大盾を構えつつ階段に歩み寄り、皆がそれに続く。怪しくも薄暗い階段を抜けると、罨を警戒し全員が素早く陣形を固める。が、

「……。何も、無いですね。」

「何も無いな。」 「何もないねえ。」 「何もないですよ。」
「何ありませんわ。」

何も、無かった。清々しいくらいに罨も、モンスターも無かった。あるのは短い洞窟と、その先に広がる大きな湖だけだ。何となく気の抜けた足取りで進むと、その先にある湖の畔に着いた。巨大な湖は透き通って底まで見えており、底には青い宝石のようなモノが発光している。その光は高い天井にまで届いており、一面を青く染めている。全員がその景色に見惚れ、感動していた。暫くの間呆けたように立ち尽くしていた一行だが、以外とこの階層が広いのを見て取って慌てて進みだした。この湖、向こう岸が見えない程に広いのだ。岸沿いに歩みを進める一行だが、この階でもモンスターや罨は一切無い。砂状になった地を踏みつつ、進める所まで進んだが一向

に出口である階段も、向こう岸も見えない。ひたすら歩くことに疲れた一同は地に腰を下ろし、休憩を取ることにした。コウは静かに腰を下ろし、周囲を眺める。マリーは腰の皮袋からドライフルーツを取り出して齧っている。その近くでオリーブが座り、タイムはあれこれと荷物を取り出してオリーブに話しかけている。そこから少し離れた所では、カトレアが懷中時計を取り出して真剣に見ている。美少女は何時みても飽きないなと堪能したところで、そんな考えをまったく感じさせない表情でコウはカトレアに近づいた。ちなみにこのポーカーフェイスは、先日 of 羞恥地獄の際に会得したモノである。コウが近づくと、カトレアは時計を翳して口を開いた。

「・・・お兄さん、ここ、何かおかしいです。見てください。」

そう言って渡された懷中時計は、確におかしかった。針が狂っているのだ。異常な程速い速度で回り続けており、かと思えば急に止まる。といった動きを繰り返している。戸惑った表情のカトレアは、続けて異常を指摘した。

「この時計は魔的な処理を施されていて、磁場などでは狂わないようにできてるです。なのに針が狂うのは、恐らくですが、」

と、言葉を切り、言いづらそうに続ける。

「この近辺に、大きな、もしくは大量な魔力、もしくは魔力に近似した力の反応があるということです。」

異様なまでのモンスターの無い階層。不純物一つ無い湖。そして、異常なほどの魔力の反応。これらの意味することは一つ。

「・・・腹を空かせた何かが、ここにいてることか。」

「はい。それも、相当な大きさか、数なモノが。」

そう言ってカトレアは、額の汗を拭った。どうやらかつて無い状況に緊張しているようだ。コウとカトレアは急いで皆の元に戻り、先程の考察を伝えることにした。走り寄ったコウを見上げる面々は、何事かと身構えている。コウは口を開き、鋭く、緊迫した声でそれを告げた。

「皆、大変にゃ!!」

囁んだ。盛大に。

焚火の上で、鍋が軽快に音を奏でる。火の明かりに照らされて、むくれたコウの顔が赤く染まる。あれから一仕切り皆に笑われたコウはいじけていた。緊張していた空気がコウによって弛緩したところで、カトレアから改めて危険がある可能性を伝えられた一行は、話し合いの後に一泊して帰還することになった。なぜ一泊するのかというと、単純に疲労したところをモンスターに狙われれば危ないからだ。三層には居らずとも、上階である二層、一層にはモンスターが多い。よって、小さく焚き火をして食事を摂り、寝る時には見張りを二人ずつ、交代でたてることによって奇襲を防いで朝になったら帰還、という手筈になった。幸い、暫くすれば時計は元に戻ったので時計を基準に十時から四時間ごとで交代と決めた。現在は八時の食事を済ませたら荷を整理し、いらない物を捨てていざという時の逃走に備える予定だ。いつまでも拗ねていられないため、コウは立ち上がってテントに近づく。鍋を見ていたタイムにやりと嫌な笑みで迎えられたコウは、少し構えつつやることがないかを聞いた。

「何か、手伝うことは無いか？」

「あら、それじゃあ皆を呼んでくださいます？ そろそろスープが出来上がりますの。お願いしますにゃ。」

さりげなく、かつ絶対気づくようにからかわれた。腹の立つ、しかし可愛い口調で。しかし、やっぱり腹が立つ。したり顔を表面上スルーしつつもやるせない空気を発しつつ、コウはテントに向かった。

コウとオリーブ以外は眠り、静かな空間の中で焚き火だけが音をたてている。迷宮内には風が無い所為か、湖には波が無く、波音もない。そんな静かな空間の中で、オリーブがふいに話を始めた。

「コウ殿。実は、折り入って、お願いしたいことがあるのです。」

真剣な佇まいで話された言葉に、コウは背筋を伸ばして何かと答える。すると、

「コウ殿のことを、コウ、と呼んでもよろしいでしょうかっ!!」

意気込んで放たれた言葉は、大したことのない内容だった。勿論。とコウが返すと、オリーブは安心した表情で息を吐いた。

「ふう。・・・ありがとうございます。実を言うと、男性の名前を呼び捨てで呼んだことが無くて。命を預ける仲間としても、私個人としても、コウど、コウのことは親しみを籠めて呼びたいと思って

いたんです。ですが、機会がなかなか無くて。」

やっと聞けました、と笑うオリーブに、コウはそういえばオリーブのことをあまり知らないと感じいた。この世界で、最初に話した女の子。コウがオリーブ自身のことを訪ねると、オリーブは少しはにかみながら話し始めた。

「俺もオリーブと仲良くしたいと思うよ。そういえば、俺は言ったけど、オリーブがブーゲンビレアに來た経緯はまだ聞いてないや。聞いてもいいかい？」

「そんなことが知りたいのですか？コウは変わっていますね。・・・」
じ、実を言うと、家出なんです。私の育った国は、ブーゲンビレアより西にあるシンビジウムという国で、私の家はそこの貴族なんです。父が代々公爵を継いでいる家柄で、次の公爵もその子供になると決められている長く続く血筋です。・・・ある日に父が病で倒れることがありました。そのとき、私と兄とが跡継ぎのことで父の私室に呼ばれたのです。私は長女ですが、上に兄がいるので家を継ぐことは無いと思っていました。兄を支えて家を守れと、そういうことを言われると思っていました。ですが、父はお前が家を継ぐのだと、私に言ったんです。頭が真っ白になって、気づけば部屋の外にいました。兄はまだ父と話しているようでしたが、そんなことが気にならないくらいには驚いていました。それから暫くして、兄も私が家を継ぐべきだと言い出したんです。兄はいずれ公爵になると常々宣言していましたし、それに見合った努力をしている人でした。そんな兄にも背を押されて、私は怖くなったんです。怖くて、責任感に押し潰されそうで・・・父が回復した後、私はタイムを連れ

て家を出ました。逃げたんです、責任や、義務から。」

長く話して疲れたような顔をしたオリーブは、しかし話し続けた。誰かに聞いて欲しかった話を、重い荷物を降ろすかのように。

「そうして逃げた先にあったのがブーゲンビレアです。自由で、活気があって、美しい街に魅せられて、私はこの街で生きようと、そう決めたんです。煮え切らない思いで、半端な覚悟で家を継ぐより、兄に家を任せて、私はここで生きようと。所詮、言い訳にしかない考えですが、これでいいのだと、私は今も思っています。本当は、騎士になりたいくて学んだ剣だったのですけど、冒険者として振るうのも悪くないと、思っているんです。・・・軽蔑、しましたか？　こんな、弱い女がギルドマスターだなんて、笑っちゃいますよね。」

弱弱しい笑みを浮かべたオリーブは、茶化す様な口調で言葉を切った。それに対してコウが口を開いたところで、

水音が、聞こえた。

即座に剣を抜いた二人は、湖に向き直る。すると其処には、いくつもの暗い影が湖から上がってくる様子が見られた。コウは咄嗟に鍋を掴むと、剣の腹で叩き大きな音を立てた。何度か叩いてから鍋を放り捨て、叫んだ。

「敵だああああー！！！！！！」

簡潔な内容だが意味は伝わったようで、テントから仲間が飛び出してくるのを背後に聞きながら、コウは剣を構える。影は数を増しながらこちらににじり寄ってきている。

焚き火の明かりが見えないほど遠い湖面に、少女の様なシルエットの影が立っている。ソレは、何の感情も無く、無機質にただ見つめている。来訪者を。三隅 香を。

迷宮之拾 荊棘の道に行く。(後書き)

おはにちばんわ、月海苔です。そろそろ物語を進行させつつ、キャラクター達も掘り下げていききたいと思います。この先の展開は、大体のことは決めてありますが細かくは決めていないので、丁寧に一話を作りつつ流れを作っていきたいとおもってます。では、また次回にお会いできたら。

番外之貳 彼女の事情。くオリーブの場合く（前書き）

月海苔です。やっと書けました、一万PV御礼の番外編です。長くかかった割に短く、微妙ですが精一杯ですのでご容赦を。そして最後に、皆様に感謝を。拙作をご覧いただき、真にありがとうございました。これからも多くの人に読んでいただける作品を作るため頑張ります。では、また本編で。

番外之貳 彼女の事情。くオリーブの場合く

屋敷の庭には美しい花が咲き誇っており、オリーブはそれを眺めながら物思いに耽ることが、偶にある。内容は多岐に渡る。些末事から人生についてまで色々と思索に耽り、悩み抜いてから結論を出す。今まではそうしてきたし、その結果が悪い方向に向かったことは殆ど無かった。が。

「はあ・・・。」

重いため息が漏れる。今度の悩み事ばかりは、オリーブのみが悩んで解決する様な事柄では無いのだ。

———私が、ロンバルディアの跡を継ぐなんて。

万が一にもそんなことはありえないと、そう思っていた昨日までの自分が憎らしい。オリーブは花壇のふちに腰掛け、昨日のことを思い出す。

「は・・・？い、ま、なんと仰いましたか、父上！？」

オリーブは目の前のベットに横たわる父の言動が信じられず、思わず父を問い詰めていた。意気込んで前のめりになるオリーブを押し止めたのは兄であるアリウムだ。オリーブの肩を抱くようにして押し止めると、背筋を正してベットに向き直り、平常の時と変わらぬ声色で問うた。

「オリーブ！父上は病床の身だ、大きな声を出すな。・・・しかし、オリーブが大きな声を出す気持ちも、分からない訳ではありませんよ父上。先ほどの発言の理由は、きちんとご説明して頂けるんですよね？」

落ち着いた声で問うた兄に父が重々しく頷くのを見ながら、オリーブは心の中で再度思った。何かの間違いだと。

————私がこの家を継ぐなど、何かの間違いだ。

そう、強く思った。

気づいたときにはオリーブは廊下に居り、重厚な扉の向こうである父の私室では未だ話し合いが続けられているようだった。兄の説得で考え直してくれればいいと、オリーブは神に祈るような心持ちで願った。その日はふらふらと自室に戻って茫然自失のまま一日を終え、今日は朝から庭園で思索を続けている。膝を抱えるようにして地を見つめ続けるオリーブは、ふと耳に入った音に顔を上げた。足音だ。

「お嬢様！こんな所に居らしたのですね、さがしましたわ。執事がお嬢様が昼食を食べにいらっしやらないと心配しておりました。さ、食堂へ参りましょう？」

足音の主はタイムだった。数年前に雇われたメイドで、武の心得があることと歳が近いことからオリーブの専属となった。歳の近い者と親しく接する機会が無かったオリーブは、最初はぎこちなかったものの、次第に彼女と打ち解けて仲良くなった。今では人に言いにくい相談も彼女になら出来るくらいに仲が良くなっていたし、タイムの方もそう思ってくれているとオリーブは信じている。時折、スキんシップが激しかったり言動が崇拜的でしたらあったりするのには勘弁してほしいが。オリーブは微笑むと、彼女に昼食を摂らない旨を伝えた。また、暫く一人にしてほしいとも。タイムが心配そうな顔つきで何度も振り返りつつも去ってゆくの見届けて、オリーブはまた思索に耽る。今度の悩み事は、一日だけでは解決しそうになかった。

そして数日の時が無為に流れ、今度は兄から家を継ぐようにと諭された。オリーブは頭の隅から熱くなる様な錯覚を覚えながら兄に噛みついた。

「何故です！？兄上も、父上に呼ばれたときは反論なさっていたではありませんか！！そもそも兄上は長男で、私は長女です！普通に考えれば兄上が跡を継ぐのが正当な後継ではないのですか！？」

オリーブの激しい反論に、アリウムは眉を顰めると俯き気味になりながら答えた。

「私では、駄目なのだよオリーブ。お前でなければこの家は継げないのだ。今は言えないが、そこには正当な理由がある。だか「では！！！！！！」！」

「では、その理由とやらを教えてください、兄上。」

「……。」

オリーブの言葉に、アリウムは押し黙るばかりだ。沈黙が訪れた書斎に背を向けると、オリーブは荒く乱れた足どりで部屋を出た。自分に関わることなのに、その一切を知ることができない。そんな曖

味な状況のまま家を継ぐほどオリーブは権力を欲してはいなかったし、散々はぐらかされた後に用意されたお立ち台に上がるほど愚かでも、大人でも無かったのだ、彼女は。自室に戻ると彼女は、前もって用意していた地味な色合いの背囊に隠してあった荷物を詰め込み始めた。こんな物が役に立つ日が来なければいいと、オリーブはそう思いながら荷を私物を入れる長持に放り込んだ。

そして、ある日の早朝。オリーブは肩に背囊を下げ、腰に剣を佩いて庭に立っていた。父は回復してからも意思を変えず、兄も顔を見れば説得してくる。次兄は今はどこにいるのやら。放浪癖のある彼は、半ば勘当されたような状態だ。跡継ぎ問題の解決の鍵にはならないだろう。なら。

「私がいなければ、兄上もおとなしく跡を継いでくださるはず。」

オリーブは呟くと、庭の花々を目に焼き付けてから生垣に向かった。正面の門は衛兵がいるからだ。生垣に沿って暫く歩き、ある所で足を止めた。周囲を見回して誰もいないことを確認し、抜け穴を通ろうとしたところで、

「こんな時間に、何処へ行くんですの？」

「きゃあー!!」

突然掛けられた声に身を竦ませた。慌てて振り返ると、そこにはタイムが立っていた。いつものメイド服ではなく、濃緑の軍服のような服を着込んでいる。オリーブが何も言わずに黙っていると、タイムは軽く息を吐いてからオリーブの背を押した。生垣の外に押し出されて驚いているオリーブを後目にゆっくりと生垣から這い出てきたタイムは、いたずらっぽく笑いながら声を掛けてくる。

「お嬢様一人では心配ですから、わたくしも付いていきますわ。」

「な、なんで？ 私は「何もおっしゃらないでくださいまし。」……」

狼狽えるオリーブに畳み掛けるように言葉を紡ぐと、タイムは担いだ荷を揺らしながら数歩先に進み、振り向いた。

「お嬢様は衝動的に行動される方ではないのは、タイムも知っておりますわ。何か思うことがあってこういった選択をなされたのだと思います。深く事情を聞くことはしません。ただ、本当に一人にだけはならないでほしいのです。ですから、どうかわたくしを連れて行ってくださいませ。……お嬢様の傍にいないと、わたくし心配で満足に食事もできませんわ。」

最後の部分だけ茶化して語られた言葉は、しかして深く心の籠った言葉だった。オリーブは軽く頷き、タイムに感謝すると駆け出した。

未練を断ち切るように、速く、疾く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2498x/>

迷宮エトランゼ

2011年12月7日00時08分発行